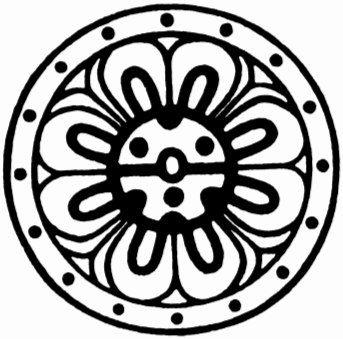
（川口勇書）

会誌名「層富」（そは・そふ）**の由来**

私たちが住んでいる平城ニュータウンの地域は、古代には「層富」または「曽布」「添」とも記され、「倭六県」（やまとのりくのあがた）の一つでありました。出典は『日本書紀』の神武即位前紀己未年の春二月壬辰朔辛亥（20日）の条にみえる「層富県」によりました。

題字もはじめ小さく、あと大きくしましたのは皆様の将来と本会の末広の発展を願ったものです。

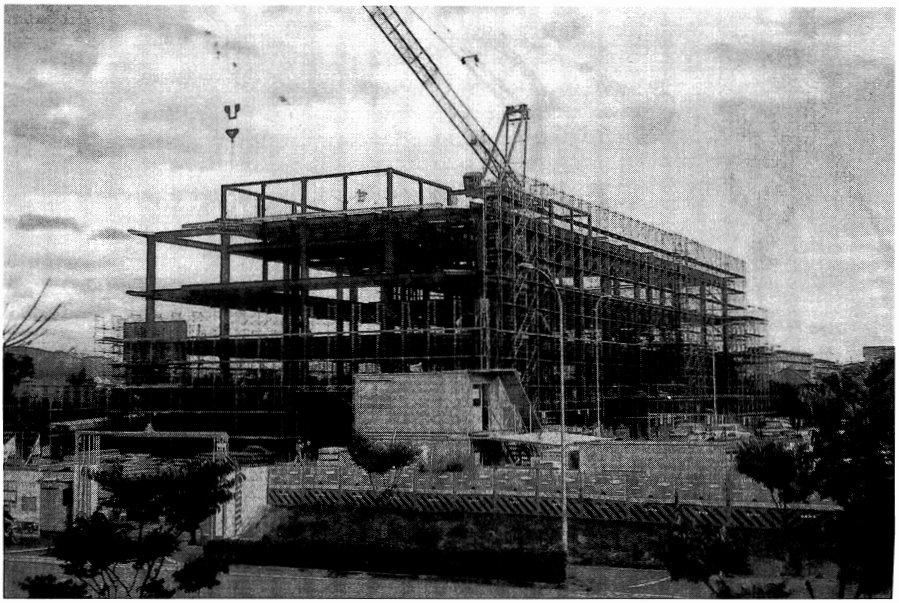
古代大和の由緒ある地名を理事会の賛同を得て会誌の名としました。ご愛顧の程を。　（網干善教）



会　章

平城ニュータウンの「平」と文化協会の「文」を上下に組み合わせ、単純な円形にまとめ、音如ヶ谷瓦窯跡から出土の古代軒丸瓦の中央部分に配置したものです。蓮華の中の埴輪の顔のようにも、二人三脚で楽しんでいるようにも見えます。

（基本デザイン　朱雀・筧　裕）



建築中の奈良市北部会館

第二十一号　目次　二〇〇四年

巻頭言……網干　善教　1
記念講演
最近の飛鳥発掘の成果……網干　善教　2
〝すかたん近衛兵〟嘆き節……繪内　正久　6
短　歌……21
漢　詩……29
俳　句……30
グループからの便り……35
観月の夕べ……71
第二十一回文化祭記録……72
二〇〇四年総会記録……77
役員名簿……86
編集後記

巻頭言

はじめに

会長　網干善教

いま、大和のあちこちで田植えが行われている。春さき苗代がつくられ、種が播かれ、初夏の太陽の光をあびて、新しい稲の生命がすくすくと育まれていく。

平城ニュータウンに産声を挙げた私たちの文化協会も成人式を経て歩むまでに至った。

『中庸』という本の中に、孔子が顔回という人をほめた言葉に「一善を得てば、即ち拳拳服膺す」とある。その意味は一つの善いことを会得するとそのことを胸の中に大切に捧持して、忘れないように、失わないように努力し、それを立派に育てていくことの大切さを諭されているのである。

私たちも文化協会の活動のなかで、いろいろな機会に学んだことを、日常生活の中で生き、有意義な人生を送りたいと思っている。

今後も積極的に参画、参加され、多くの方の御支援、御協力を得て充実、発展していくことを期待しよう。

記念講演（要旨）

最近の飛鳥発掘の成果

関西大学名誉教授　網干善教

今、明日香村では話題を呼んでいます発掘調査が三個所で行われています。その一つは文化庁による「キトラ古墳」の発掘、次に奈良県立橿原考古学研究所による「飛鳥京跡」の発掘、もう一つは石舞台古墳の西側の旧高市小学校の校庭を明日香村教育委員会が発掘調査していまして、それぞれの遺跡におきまして成果を挙げています。その概要について説明します。

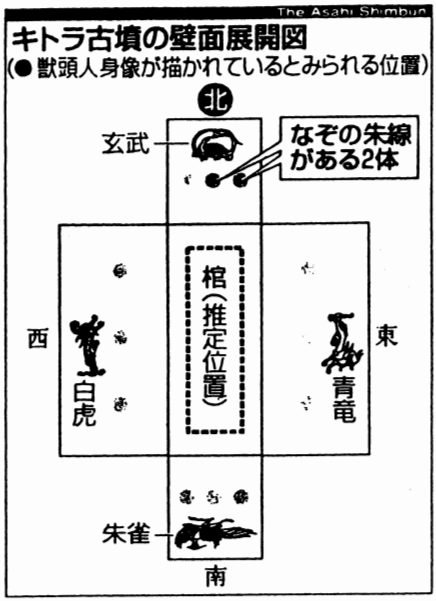
まず、キトラ古墳の発掘ですが、これはいま核心の部分を掘っているのではなく、発掘に向けての準備ということで壁画の保存ということが先決の作業としてすすめられています。その間にカビが生えたとか、壁画の漆喰が相当痛んでいるとかが判明し、作業が難航しているように報道されているのは皆様も御承知のことかと思います。

壁画についてみますと、天井部に星の図が描かれていることはすでに事前の調査によって分かっています。その天文図にはどのような図が表現されているかといいますと内規と外規、赤道と黄道、そして紫微垣と二十八宿、その他たくさんの星座がみられますが、その各々の星座の形が写真のアングルの関係で明確でないところがあります。今回の調査は正確な星座の位置や形がどうなっているのかということへの期待があります。このことはアジアの中でどの星座の図に近いのかという課題であり、これがキトラ古墳を解明する一つの要素にもなってくるかと思われます。

なかでも一寸疑問なのは赤道と黄道の交わる点が、通

常の図と約九〇度ほど振れている点について、何故そうなったのかという疑問があります。私たちが今求めているのは描かれている星の正確な図であります。これは今後よく検討したいと思います。

次に壁画の左（東側）、右（西側）の中央上部に表現されている日（太陽）と月です。特に金で描かれた太陽の中に三本足の烏の絵が描かれていたことがかすかに残った黒い線によって推察されています。



太陽の中に烏を描くことは中国をはじめ、朝鮮半島の壁画にも見られるものでありまして、わが国では法隆寺にあります玉虫厨子の背面の絵の中の左（東）にあたるところに鮮明なものがあります。

御承知だろうと思いますが、神武東遷伝承にあります鵄が三本足の烏であり、この話に基づいて使用されたワールド、サッカーの日本代表のエンブレムがこの三足烏でありました。

そうしますと反対側の西壁には何があるのでしょうか。東の太陽図に対して月の像であることは当然で、通常これは銀で表現されます。恐らくキトラ古墳でもそうなっているでしょう。月の中には蟾蜍（せんじょう）と呼んでいます「ヒキ蛙」が描かれます。ヒキ蛙は通常の蛙より体が大きく、皮膚に「いぼいぼ」があり、夜行性であるといわれます。今のところこの写真はありませんが、やがて公表されるでしょう。

次に四神図ですが、東壁面に青龍図、南壁面に朱雀図、西壁面に白虎図、北壁面に玄武図が描かれていることは以前の調査によってすでに分かっています。ただ、問題はあります。例えば西壁面の白虎の向きが高松塚古墳や

鉤鎌使用の図像（中国画像石）

奈良薬師寺本尊台座の白虎図と異なって北を向いているということです。なぜこのように逆向きになっているのかということは疑問であり、今後よく議論する必要があります。

もう一つは青龍です。東の壁のちょうど青龍の描かれたところに漏水の痕跡があり、形態がよく分かりません。これも今後鮮明な写真や実測図が公表されますと高松塚との比較も容易になるでしょう。

次に四方の壁に獣頭人身（頭が獣で、身体は人間と組合せた図）が描かれているのが以前から分かっていました。そしてそれが子、丑、寅……といった十二支像であることも一部の絵から推定できました。今回の調査によって北側の中央が子像であり、東壁の北側が寅像であることが明確になりました。しかもその寅像が右手に戈（鉾＝ほこ）を持って立っている姿であることが知られました。

戈は攻撃用武器ですが、武器には防御用武器と儀仗用武器とがあります。キトラ古墳の場合は戈に飾が付いていることから儀仗用と考える可能性をのこしておきたいと思います。

北側の子と丑像と思われる像も武器をもっています。私はこれを中国の事例から「鉤鑲」（こうじょう）という武器と考えています。

それにしてもなぜ御墓の中に、このような武器をもった獣頭人身像が描かれているのでしょうか。考えられますことは墓の中には被葬者の御遺体が納められていますので、それを守るという精神的なものを表現したものと思っています。問題は南壁や西壁にも同じようなものが

描かれているかどうか、そしてどのような武器を持っているかということにも関心があります。こうした正確な資料が公表されますと研究は深化するでしょう。

石槨の中には漆塗りの木棺が納められていることはすでに分かっています。それがどの程度であるかは今後の調査で明らかになります。

出土品に対する関心は棺の飾金具や釘、大刀の刀身が出ていますので期待されるのは外装金具、これがありますと他の古墳の出土品と比較が容易になります。人骨が出ますと性別、年齢などもある程度判明されるでしょう。これは被葬者像にも関連してきます。

いずれにしましてもこれからの調査の結果に期待がもてます。楽しみです。

次に宮跡の調査ですが、この発掘調査はすでに四〇年以上続いています。今回は全面に石を敷いた広場のようなものと掘立柱の建物跡が出てきました。そしてその位置が宮跡の中心部と考えられます。過去の調査成果とつなぎ合せて、これをふくめてどのような構造になっていたかに関心が高まります。今年度も引続いて調査が行われますので、大きな期待をもっています。

次に石舞台古墳の西側の学校跡の発掘です。この場所は「島庄」といわれる村ですがこの「島」とは、かつて蘇我馬子が飛鳥川の傍に邸宅をつくり、池を掘り、島を築いたことから「島大臣」と呼ばれていました。一つには、その「島邸跡」と考えられるということ。もう一つはこの島宅が、大化改新後天武天皇の皇子でありました草壁皇子に与えられ、皇子はこの島宮で薨去され眞弓丘に葬られたことになっています。この時の葬送の歌であります挽歌が『万葉集』にのこっていましてこの歌の中にも「池」に因んだものがあります。

また島宮のことは奈良時代の文献にも出てきますが、今回出土した建物がどのようなものであるのか、果して島宅や島宮と関係があるのかという問題は今のところ小規模な範囲の発掘でありますので定かではありません。これからも継続される予定ですから今後も期待し、注目していきたいと思っています。

″すかたん近衛兵″嘆き節

繪内正久

本誌20号では燃えだした天皇御常御殿のお庭先へ走りこんだ私が、泥にまみれた天皇および皇后両陛下の礼装を思いもよらず拾いあげ、安全な場所に無事移し、さらにかき餅がいっぱいつまった菊の紋章を線彫りした銀の茶筒を手にしたところで筆をおいた。ここで目を表宮殿に転じ、奥宮殿といわれる天皇、皇后と皇子の三棟の御常御殿より先に炎上した表宮殿の様子を延焼の時間を追ってお伝えしよう。

終戦後40年、久しぶりに再会した近衛歩兵第二連隊第九中隊の戦友から聞いた生なましい秘話ばかりである。私と違って火中にとびこんだ勇敢な兵たちの貴重な体験談だ。親兄弟、親友には打ち明けたが発表する機会がないまま胸におさめていたという。

昭和二十年五月二十五日。この朝宮城御守衛に上番したのは近衛第一連隊かたひきついだ、わが第二連隊第九中隊。二重橋正門儀仗衛兵と賢所儀仗衛兵というもっとも重要かつ栄誉ある勤務を命じられた。両衛兵上番以外の残余の中隊員は表宮殿防火隊となり、一部は中隊で待機した。首都上空に空襲警報が鳴り渡ったのは同日午後10時半ごろ。米B29百五十機による波状じゅうたん爆撃で、皇居に近い霞が関の官庁街が目標にふくまれていた。敵機は二時間ほどでひきあげたが、地上では武器を持たぬ老幼男女が獰猛な野獣のごとき劫火に逃げまどい、皇居の濠にもその姿が映っていた。

日は改って二十六日午前一時前、深夜の衛兵交代時間だ。衛兵係の古参兵が正門や鉄橋衛兵を引率、正門裏の守備隊司令部にひきあげてきた。途中表宮殿横の広場を通ると、宮内省消防隊が万一に備えて広場にはわせていた消火ホースをまきとり、撤収作業の最中だった。宮城内にはなんの被害もなく、みんなほっとした表情であっ

た。きょうの空襲はこれで終わりと見たのだろう。しかし目の前の桜田門から霞が関にかけ日本の行政機関が集中した一帯は猛火に包まれていた。

そのうえ、この季節に多い関東名物赤城おろしのからっ風が都内の夜空にふきあれ、風速25メートルを超えていた。しかも風下となった皇居をめがけて、赤ん坊の頭ほどの火の玉が尾をひきながらばらばらと飛んできた。桜田濠や祝田濠に落下したのが水上を滑走、突風にあおられて再び空中に舞いあがった。それが魔風に乗って濠の堤上の松の梢越しに、宮城内に襲いかかってきた。そして表宮殿前の御車寄（みくるまよせ）と東車寄（ひがしくるまよせ）の前の広場に落ち、風に勢いを得て広場を走り狂った。その場所はいまの昭和宮殿の新年参賀や天皇誕生日のお祝いに国民が集うあの広場だ。なかには跳びはねて、宮城の屋根の上を転げまわるのもあった。それでも宮内省消防隊がひきあげるころには、風もおさまりかけ飛んでくる火の粉も間遠になっていた。それが裏目にでた。

たったひとかけらの小さな火の粉が、宮殿東車寄の銅板屋根と同玄関の屋根瓦の継ぎ目のわずかなすきまに、しのびこんでいたのだ。瓦の下には一面、板を薄く削ったコバ板がしきつめられていた。それがつけ木となって一触即発めらめらと燃えあがり、おり悪しく吹きこんだ一陣の突風に押されるように、宮殿の奥へと屋根裏をひた走った。

下番衛兵に解散を命じた古参兵が、ほっとひと息ついて何げなくいま通ってきた宮殿の方向をふりむいた。赤いちらちらするものが目にとびこんだ。屋根裏をはっていた炎が瓦のすきまからひょっこり顔をのぞかせた。不幸中の幸いというべきか。一瞬目をこらした。何かのまちがいではないか。だが、とっさに

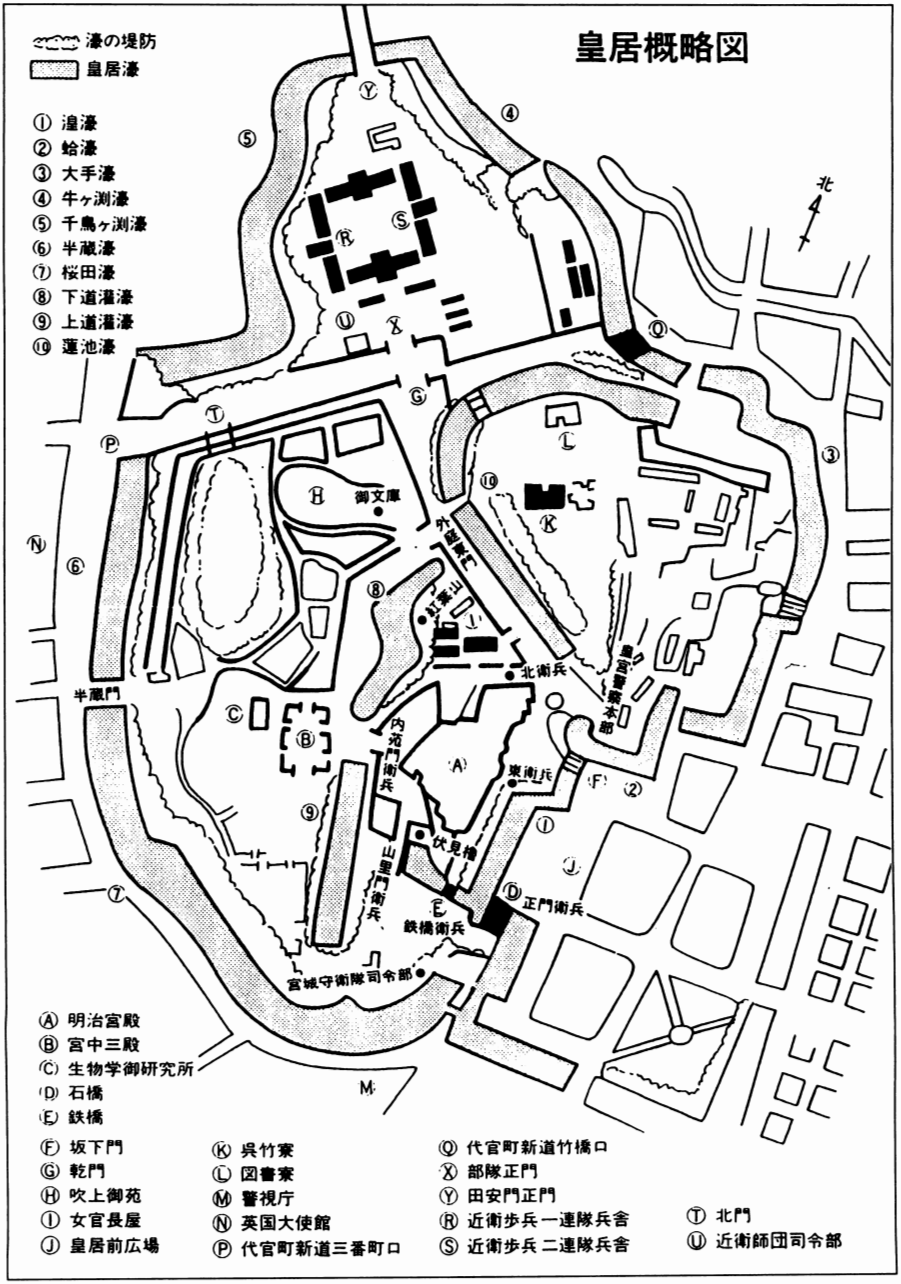
「宮殿　出火ァ」　大声で叫んだ。さっきより火が大きくなった気がした。まちがいない。司令部内に

「宮城出火ァ　宮殿　火災ィ……」　連呼した。

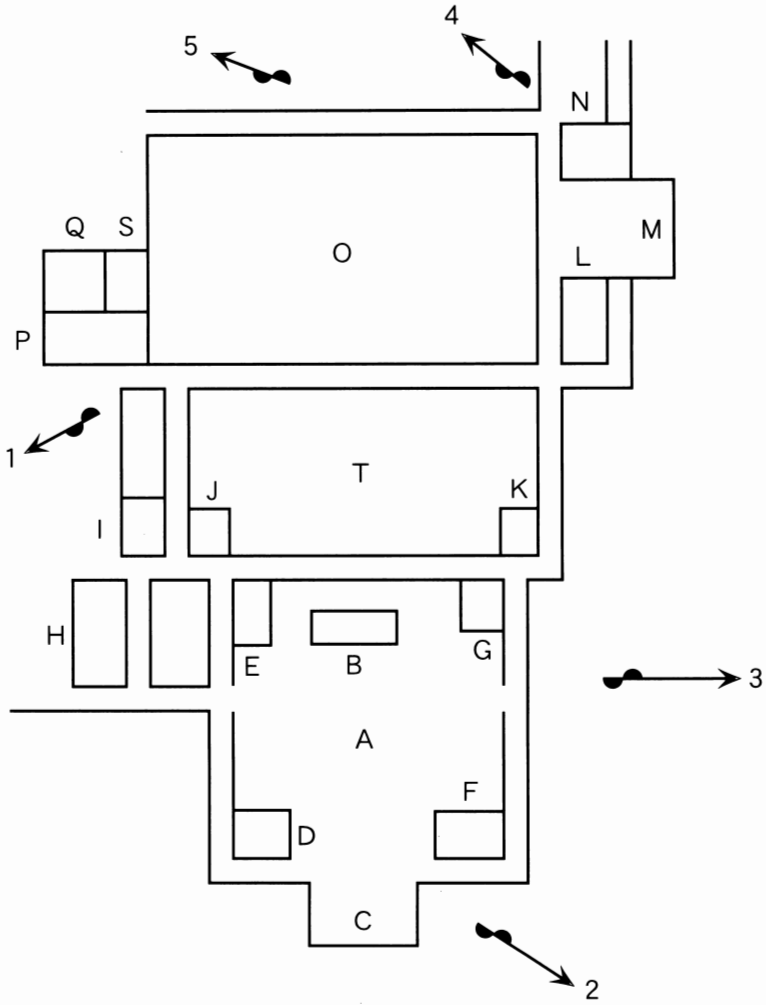
声に応じて司令部内から下番兵や次の上番控兵が、どかどかとかけよってきた。騒ぎに宮城守衛隊司令官（大隊長）、正門衛兵司令（中隊長）もとんできた。

「非番兵のみ消火に急げェ　……御物を運び出せェ」

悲鳴に近い命令。あってはならぬ一大変事に司令官の声もうわずっていた。司令部前から二重橋の鉄橋を渡って表宮殿まで、走って二分とかかるまい。古参兵にひきい


皇居概略図
濠の堤防
皇居濠
① 湟濠
② 蛤濠
③ 大手濠
④ 牛ヶ渕濠
⑤ 千鳥ヶ渕濠
⑥ 半蔵濠
⑦ 桜田濠
⑧ 下道灌濠
⑨ 上道灌濠
⑩ 蓮池濠
北
御文庫
竹橋門
半蔵門
内苑門衛兵
北衛兵
東衛兵
皇宮警察本部
伏見櫓
山里門衛兵
鉄橋衛兵
正門衛兵
宮城守衛隊司令部
Ⓐ 明治宮殿
Ⓑ 宮中三殿
Ⓒ 生物学御研究所
Ⓓ 石橋
Ⓔ 鉄橋
Ⓕ 坂下門
Ⓖ 乾門
Ⓗ 吹上御苑
Ⓘ 女官長屋
Ⓙ 皇居前広場
Ⓚ 呉竹寮
Ⓛ 図書寮
Ⓜ 警視庁
Ⓝ 英国大使館
Ⓟ 代官町新道三番町口
Ⓠ 代官町新道竹橋口
Ⓧ 部隊正門
Ⓨ 田安門正門
Ⓡ 近衛歩兵一連隊兵舎
Ⓢ 近衛歩兵二連隊兵舎
Ⓣ 北門
Ⓤ 近衛師団司令部

表宮殿（明治宮殿）概略図



A 正殿　B 玉座　C 御車寄・玄関　D 西一ノ間・二ノ間　E 葡萄一ノ間・二ノ間
F 東一ノ間・二ノ間　G 化粧一ノ間・二ノ間　H 鳳凰ノ間　I 桐ノ間　J 西溜　K 東溜
L 南溜　M 東車寄・玄関　N 北溜　O 豊明殿　P 千種ノ間　Q 牡丹ノ間　S 竹ノ間
T 中庭・丸池　1 奥宮殿へ　2 二重橋へ　3 皇居前広場へ　4 北車寄へ　5 大膳寮へ

られた十余名の兵は最初に炎が見えた東車寄を目ざした。しかし玄関の階段をかけあがると、炎がふきおろしてきた。天井が燃えている。

「これはいかん　御車寄へ回ろう……」　一同は古参兵のひと声で道をひき返し御車寄の玄関から正殿へかけこんだ。御車寄は天皇、外国王族、国賓の専用入り口、東車寄は男性皇族、閣僚、外国使臣の入り口、もう一つ宮内省よりに北車寄がある。皇后、内親王、妃殿下、華族夫人の専用入り口である。三つの車寄は巨大な四本の柱に支えられた桃山建築風の唐破風づくり。高さ十余メートルで七段の階段をのぼって御殿に入る。空襲警報と同時に宮内庁職員が平常は閉じている玄関の大戸をあけ、近衛兵や消防隊が自由に出入りできるとりきめになっていた。御車寄が二重橋にいちばん近く宮殿の南面に、東車寄は宮殿の側入り中央、北車寄は宮殿の北側にあって、その間の距離はおよそ各30メートル近かった。

正殿に入った兵隊たちは二手に分かれ、「東一ノ間・二ノ間」と「西一ノ間・二ノ間」の外国王族、皇族の控室、さらに「葡萄一ノ間・二ノ間」「化粧一ノ間・二ノ間」の皇族控室へとびこんだ。

一方、宮殿へ決死の形相でかけこむ兵隊を見て出火に気づいた宮内省消防隊が、しまいかけた消防車やホースをあわててひっぱりだし、吸水筒を抱えて消火栓や宮内省玄関前の丸池、坂下門の蓮池濠へ疾走した。その騒ぎに広場前の堤防上松並木の下にいた第五中隊の防火隊が宮殿出火に気がついた。同隊は火元の東車寄にいちばん近い所に布陣しながら、灯台下暗しで屋根裏の炎に気づかなかった。初年兵ばかりの同中隊防火隊は第一発見の功を他隊に奪われた責任感から、あわてて炎が吹きだした東車寄から御殿内の様子がまったくわからぬまま、玄関をかけあがって姿を消した。

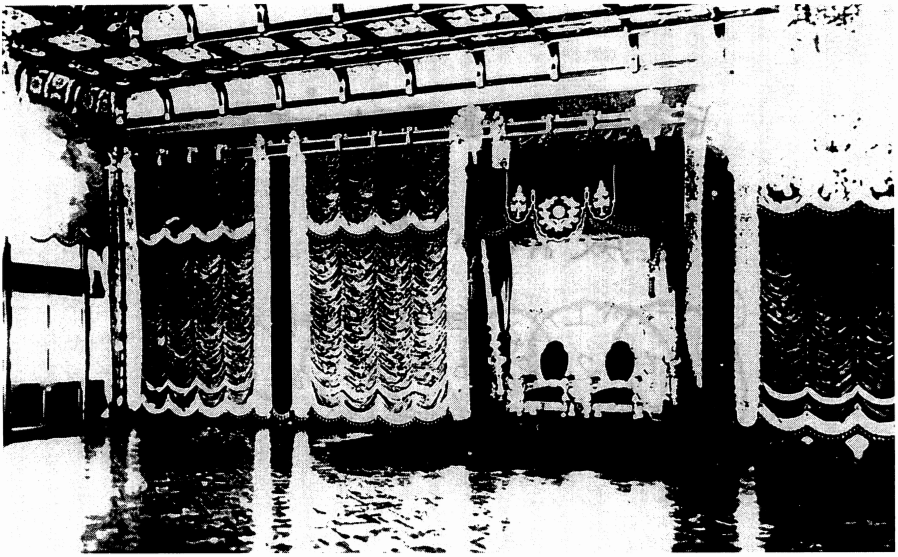
御車寄から正殿にとびこんだ守衛隊上番中で、第一発見者の古参兵に率いられた九中隊の非番兵たちは、東西の各控室や化粧の間などにあったいす、ソファ、テーブル、テーブルかけ、花びん、飾り時計、暖炉上の置き物、置時計、彫像、壁の額縁入り絵画、鏡、大理石像、はてはカーテン、肩車で天井のシャンデリアまではずして広場にリレー式で送りだしたり、かつぎだした。正殿奥に南面した玉座の壇上にあった重厚荘厳ないす二脚には、背もたれに菊花の紋章が刺しゅうされていた。兵隊たち

初めに火の手があがった東車寄
（向って左側の車寄の屋根と表宮殿屋根との接点あたりが出火点）

は恐れる気配もなく、無造作にひじかけや脚部をわしづかみにしてかつぎあげた。物によっては放り投げ、受けそこねて落としもした。敏速な行動のためには、冷静さや注意深い取り扱いなど考える余裕すらなかった。

正殿は明治、大正、昭和三代にわたる〝大日本帝国〟の輝かしい歴史を知る貴重な建造物だった。明治憲法制定祝賀式が全皇族、同妃殿下、黒田清隆首相以下全閣僚および華族、同夫人らが参集して催されたのを手始めに日清、日露戦役凱旋将軍の謁見、明治元勲の叙勲、歴代内閣の任命式、外国王族、国賓との歓談など国事、公式行事がとり行われたかけがえのないまさに国宝の玉殿だった。

兵隊たちには御殿から持ちだした家具類、装飾美術品などの値打ちがわかるはずがない。だが、いちばんびっくりしたのが外国の勲章がどっと出てきたとき。ある部屋の棚からビロードばりの小筥を両手に抱いて持ちだして、途中でとり落とした。とたんに美しい花びら型の勲章と肩にかける綬が転げでた。ついでに他の筥をあけたら丸型や長円形、星型、十字型の座金に色とりどりの宝石をちりばめた美しい外国勲章がぞくぞく。友好親善の



正殿および壇上の王座

しるしに各国から贈られ、陛下の胸間を飾られたものと直感した。とたんに体がふるえ、ずしりと急に重くなったと火急の場で感激一入だったという。

続いて驚いたのが正殿に隣接した御学問所。書棚に金文字の分厚い洋書がずらり。趣味の専門書らしい。持ち運びやすいよう机のひきだしにも、汚れた兵隊の手が遠慮なくのびた。紅白の水引きをかけた祝儀袋がごっそりでてきた。だれかに贈るためらしい。俗世間では社交儀礼として存在するが、天皇さまも時によってお使いになるようだと悟った。小学校の宿題帳のような帳面もあった。離れて旧本丸の呉竹寮にお住まいの、内親王方の学習院の宿題のノートに違いないと察した。そういえば魚の解剖図と思われる紙片が見えた。兵たちは好転しない戦果や、空襲に脅える国民の身を案じつつ、愛児の教育にもお忙しい公務を抱えながら、意をそそぐ父親像を描いていた。

あらかた正殿と控室の家具、調度品、御物類を運びだしてひと息ついたとき、東車寄の廊下の方から天井伝いに炎が襲ってきた。

「ここは、もう危ないぞォ。外にでろッ……」　袋小

路の廊下を正殿玄関から御車寄に抜け、全員無事に広場へ逃れでた。途中で正殿玉座の方をふり返ると、真上の天蓋に火が移り、仕切りの分厚いカーテンから煙があがっていた。

第五中隊の古参兵が東車寄の唐破風の屋根にのぼっていた。宮内省消防隊の消防車の上から跳び移ったと見え放水筒をにぎっていた。下から消防隊が叫んだ。

「早くおりてこいッ……屋根が落ちるぞ　危ないッとびおりろ」　瓦のあちこちのすきまから小さな炎が、ぽつんぽつんとあがっていた。東車寄玄関から宮殿内にとびこんだ同中隊の防火隊員は、入ったままだれもでてこない。御車寄から避難した第九中隊の兵隊も彼らの姿を見ていない。どうやら正殿への廊下ではなく、豊明殿へ向かう廊下の方に進んだようだ。その直後、第九中隊の防火隊十余名が東車寄から燃える玄関に突入した。豊明殿ではなく正殿への廊下を伝った。しかし、ふきだす炎にたまらず防火隊長はそこから正殿と豊明殿の間の中庭に全員を誘導脱出。さらに中庭と広場を結ぶ地下の間道を潜って無事広場に転げ出た。間道は江戸城時代のもので、勝手知った宮内省の職員や女官たちが近道に利用していた。明治初年、雷火で御殿が燃えたときも女官たちがこの間道からぬけだして命拾いしている。

九中隊の防火隊は、空襲警報と同時に表宮殿の天井にあがって出火の早期発見と初期消火が任務だった。しかし警報解除とともに天井からおりて、司令部で待機していた。それだけに責任を感じての強行突入だったが、隊長が間道の所在を知っていたので、危険を感じてすぐぬけだせた。そして方向を転じ、北車寄へ向かった。

宮殿北側に火魔はまだのびていなかった。大膳寮そばのお湯口から百間廊下にさしかかったとき、女の悲鳴がきこえてきた。

「兵隊さァーん　助けてくださァいッ……」　女官に仕える若い雑仕婦たちが金切り声をあげながら、隊員にかけよってきた。めいめい手にしていた紙包みをさしだした。包帯の束だった。日本軍の大陸進攻が始まって以来、下道灌濠に近い紅葉山の御養蚕所では皇后はじめ妃殿下、華族夫人らが戦地へ送る恩賜の包帯づくりにはげんでいた。本来は農家の主婦の苦労を知るため、皇后の思召しでつくられた農家風の養蚕所で、産卵飼育をお手ずから体験しておられた。そこでできあがった包帯はた

ばにして皇后御常御殿に保管、赤十字社へ渡していた。皇后御殿の一室を倉庫がわりに山のように、積みあげていたという。百間廊下の下をくぐりぬけ、夜空を赤く染める御殿の方へ急行すると、いきなり

「あぶないッ　とまれッ……この先に爆薬をしかけたとこだッ…」　数人の近衛工兵隊が大手をひろげ、行く手をさえぎった。工兵隊は災害や暴動鎮圧のため、宮城内に爆薬を貯蔵していた。それを利用して燃える表宮殿と奥宮殿の間に爆薬をしかけて防火帯をつくり、奥宮殿へ延焼を防ごうという作戦だった。

御学問所と百間廊下あたりの二か所にしかけた。百間廊下は女官長屋と奥宮殿と宮内省を結ぶ橋のような木造の長廊下。外見は長屋に似るが、その下をくぐりぬけられる。兵隊があわてて散らばり、地面に顔を伏せると同時に大音響。材木やガラス、瓦などがとび散った。しかし火がついたままの板やちぎれた柱が吹きとんで、逆に火点をふやし、広げてしまった。

「なんだ　かえって燃えひろがったじゃねェか　ばかなことしやがって……」　足止めをくって文句をいいながら兵隊は、天皇御殿の裏にあたる皇后御殿へ急いだ。

皇后御殿では大勢の女官がなにから運んでよいやら、うろうろしていた。年寄りばかりだ。たよりの宮内省の男性職員は、燃えだした天皇御殿の応援に飛んでいってしまった。

「兵隊さん　ありがとうございます……お願いします」さすが公卿や華族の出が多いだけに、こんな際でも礼儀正しい。室内には皇后がお輿入れの際の紋章入り漆塗りの長持ち、紋章入りの鏡台、針箱が放りだされていた。兵隊たちは恩賜の包帯をはじめお輿入れ道具など手ぎわよく運びだした。黒漆の長方形の文筥や画帳もあった。文筥のふたをあけたら、短歌をしたためたたくさんの短冊がでてきた。画帳には花鳥、静物の日本画が描かれ感激の兵隊は捧げ持って内苑門外まで運びだした。最後には幅広い白塗りのベッドやその下に敷いたじゅうたんまでかつぎだした。

そのころ表宮殿は空高く炎を噴きあげ、もはや手の施しようがない。夜空を噛みくだき唸っていた。その下に豊明殿があった。外国王族や国賓を招き祝賀の乾杯を重ね、和洋の食材を使った珍味絶佳の料理の宴につらなる

貴顕淑女を酔わせた饗宴の殿堂に、もはや面影はなかった。漆塗り折立て格天井の一角ごとに華麗な極彩色の花模様が描かれていた。壁間の額入り絵画や大鏡とともに床のチーク材まで炎に包まれていた。しかし大食卓やいす、高価なドイツ、フランス製の白磁、見事な色絵や金蘭手などの皿鉢類など食器は早くから安全な場所に移されていた。

炎はさらに奥の間へとひろがった。そこには室の名にちなんだ天皇・皇后両陛下の謁見の間「竹ノ間」「牡丹ノ間」「千種ノ間」「鳳凰ノ間」「桐ノ間」があった。著名な画家の手になる大作がまさに灰燼に帰さんとしていた。すでに熱火にさらされ、青丹の顔料が醜く変わり金泥が妖しく光り銀地がめくれあがった。炎の渦まく唸りが怪獣の最期を思わせた。華麗な炎が表宮殿をすっぽり包みこんだのは、それから間もなかった。

表宮殿と奥宮殿の境は高い築地塀のような遮蔽体で擁護され、奥宮殿への延焼を防いでいた。しかし東車寄から正殿に向かう廊下の天井を先走っていた炎の一つが、突風にあおられ火の粉となって天皇御殿の天井をつっ走り、西端のお居間の上で火を噴いた。私が仲間とはぐれ、ひとりお庭先へかけこんだときだった。それからどのくらい時間が流れたろうか。ほんとうはわずかな時間と思う。ふと目をやった御殿東端の侍従控室の屋根に、ぽつりと火がともった。はっと目をこらすと小さな赤い火がゆれていた。お庭先の兵隊や消防隊員の間からどよめきがわき起こった。御殿の東西両端から火の手が上がっては、御殿の全焼はもうまぬがれないという万事休すのうめき声と聞こえた。

しかし、庭先の消防隊や都内各所からかけつけた都消防署員たちは、放水筒を投げだしたまま。消火活動に赴く様子もない。都内各所にあがった同時の火の手に使われた大量の放水で、いっぺんに水位が下がって武蔵野台地にある宮城へは水があがってこないのだ。泥沼のようなお濠の水は継続して大量に吸いこめず、機械をこわしてしまう。彼らはひたすら天祐神助にすがっているようだ。悪火を呼びこむ魔物もあれば、鎮火の神風もあるはず。祈るような眼で、東西両端の御殿の屋根にふきあがった炎のひろがりを気にしてるようだった。

東端の侍従控室あたりの屋根の炎が横にひろがった。青い火柱が立った。近くで黄色い火柱があがった。その

豊明殿前の中庭（手前右側が加藤清正献上の丸池と噴水台）

わきに赤い火柱が――チュウリップ畑が現れた。西端のお居間あたりの屋根に涼やかな白い火柱が見える。銅版屋根にふくまれた不純鉱物が燃えているのだ。時には青い炎が大きくなり、しばらくしてピンク色に染まる。緑色の火柱まで。そんな炎があちこちに現れたり消えたりする。極北の空に流れるオーロラか――怪美な天変幻像が九重の聖なる上空に出現した。庭先の人たちは乱舞する赤鬼、青鬼、黄鬼、白鬼や緑鬼にことばを失い呆然と立ちつくしていた。

しだいに広がった五彩の炎はやがて色を失い、紅蓮一色の大火焔と変わった。あの荘厳の極みだった大屋根は火焔の中に沈んで黒い影となった。やがてその黒い影がぼやけて崩れだした。銅版が溶けて流れ落ちだしたらしい。炎の中から黒々と鋼鉄の骨組みが姿をあらわした。凛として炎の中に屹立する鉄骨は最期の抵抗を試みる勇者に見えた。だがすべてをあきらめたか、大屋根の頂きの東西両端を結ぶ長大な橋げたを思わせる眞一文字の鉄骨が、火中へ吸いこまれるようにたわみだした。中ほどから弓なりとなって、高速撮影の映像を見るごとくゆっくりとさらに折れまがる。ついに力つきたか最後は「く」

の字となって火焔地獄の中に、どっと倒れこんだ。それにつられて両端の切り妻型の鉄骨が崩れ落ちた。続いてこまごまし た鉄柱や鉄板、骨組みがばらばらと後を追った。

とたんに大きな炎が渦を巻いて立ちあがり、大小の火の粉が天高く舞いあがった。次つぎ跳び散る様子は火の矢が炎を突き刺すにも似て、しばらく宙天にとどまった後、闇に消えていった。オーロラといい、いつまでも跳びはねる綺羅星の如き火の粉といい、天皇御常御殿の最期を飾る送葬の火まつりと思える光景だった。

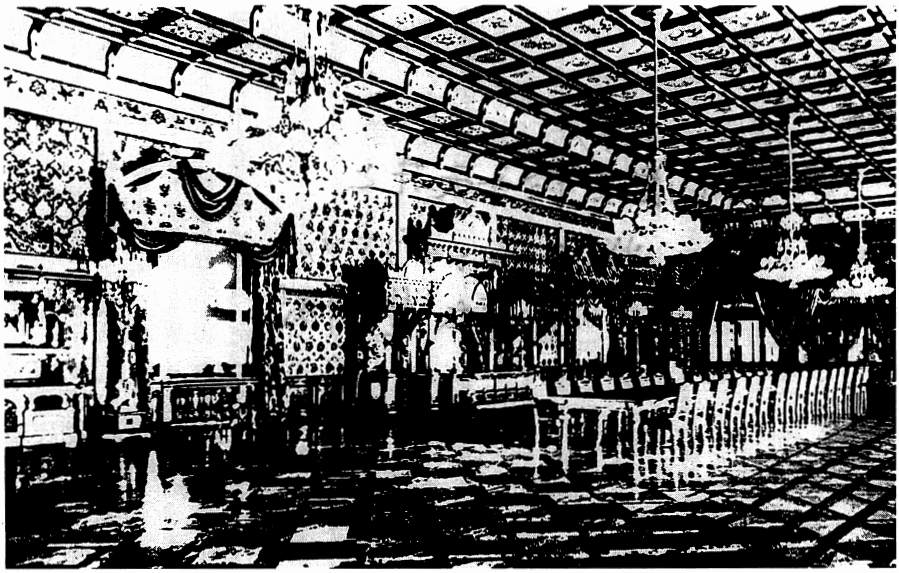
鉄骨が次つぎ火中に没すると同時に、人びとの痛恨の叫びが聞こえた。夜空をかみ砕いて唸る炎とひとつになって、大内山をゆるがした。私の前にいた女性の一団が

「ひイー」　「ヒイーッ」

人とは思えぬ悲鳴をあげた。老女官たちが大地につっ伏したり、両手で胸をかきむしり、顔を両手で覆って泣き崩れていた。その傍らに侍従の一団が無言で立ちつくしていた。身じろぎもせず炎を見つめ腕ぐみしたり、両手をだらりとたらし自失の態だった。毎日見なれた御殿が焼け失せた悲しさ、焼けだされた両陛下のあすからのご不自由な生活に思いを巡らし、どのようにお仕えし、どのようにお慰めすればよいものか。思い千々に乱れた女官と侍従の悲痛さが、その背ににじみでていた。

大屋根が落ち炭火のようになった巨大な柱や堅い洋材は、まだ真赤になって炎を高く上げていた。庭の随所につむじ風が起き、熱風をまきちらしていた。火の粉がお庭を転げ回っていた。火元から遠く離れていても肺の中まで熱風が流れこんで息苦しい。しかし庭先の人は微動だにせず耐えていた。私はそっと山里門の方へ後ずさりして伏見櫓を出て、ほっとひと息ついた。早暁の新鮮な空気を腹いっぱい吸いこんで表宮殿の方へと堤防を伝った。

桃山様式の表宮殿は跡かたもなく、巨大な熾火（おきび）の山となり見あげるほどもりあがっていた。車寄の屋根を支えた径40㌢余の四本柱は、芯（しん）まで燃えきれずワニの鱗肌のまま横たわり、樹液がしみでていた。ここの広場でもつむじ風が舞い、火の粉が走っていた。都下の一般連隊の兵、都消防署員らもまじって芋の子を洗うよう。御車寄と東車寄の間の広場は宮殿内から搬出したテーブル、い



折り上げ格天井と輝くシャンデリアの豪華な豊明殿

す、書棚、飾り棚、漆塗りの長持ち、衣装函らしいものから人物彫塑、絵画、置時計まで足の踏み場もないほど乱雑におかれていた。

広場の東端のお濠の堤防上には大勢の人が毛布をかぶって寝ていた。皇居前広場からも見える枝ぶりのいい松の生い茂った場所だ。腕をふりあげたり拳をつきだし、脚をふんばり、体をよじった人もいる。服や靴が焼けこげて泥だらけだ。不自然な姿に目を見はると、すべて死体だった。軍靴の底から白骨がはみでていた。ふと足元に目を落としたら、搬出物にはさまるように、そこにも横たわっていた。両腕をつきだし、今にも起きあがってきそうに見えた。そのような尊い犠牲者が御物の間を点々と埋めている。

五月の短い夜はとっくに明けていた。夜空に仰ぎ見たあの五彩の火焔に対し、白日の下に見たものは地獄だった。しかし（この人たちは幸せだ――）と思う。（異国の空、密林の中、海底ではなく天皇の坐す宮城の中で、まさしく城をまくらに死ぬとは最高の死に方ではあるまいか……）　粛然とした気分になった。願って得られる死に場所ではない。熱火に炙られ、泥にまみれ、不慮の

死、無念の死であっても（……うらやましい……）　二度と起きることのあろうはずがない時と場所で、これほどの栄誉ある殉じ方はないのではないか。そう思いつつ表宮殿のまだ燃えさかる残火の山をぼんやり見つめていた。（間もなく上陸してくる米軍と戦って死ぬとしても、どこかの海岸や穴の中、林の奥よりはるかにいい）　自分の死に場所を思い浮かべた。

後でわかったことだが、死者は三十六人にのぼった。東車寄近くに布陣していた第五中隊の初年兵ら十五人と、官民の消防隊員だった。初年兵は正殿と豊明殿に囲まれた中庭にある丸池の中に、全員沈んでいた。互いに固く手をにぎり、輪になっていた。その丸池の近くに九中隊の防火隊が逃げこんだ地下道があった。そこまでたどりつけなかったのか、その存在を知らなかったのか、真相はわからない。その丸池は江戸城改築を命じられた肥後の加藤清正が徳川家康に献上したものという。

初年兵たちは名誉の戦死者として、ハワイ真珠湾攻撃の軍神と同じように即日二階級特進した。すべて特攻隊と同じ扱いだったが、陸軍省の通達で郷里の葬儀は秘かに行うよう指示された。皇居炎上について首都圏の新聞に一段十五字ほどの小さな記事が目立たぬよう載せられた。幸い都民たちは家を焼かれ、避難や食料探しに追われ新聞を読むひまなどなく、ほとんどが気づかなかった。

話を宮殿炎上の現場にもどそう。午前六時ごろにはさしもの猛火もほぼおさまって、残り火がところどころでくすぶり、白煙をあげていた。御車寄の焼け跡に立つと、坂下門内の宮内省庁舎から旧本丸、蓮池濠上の多聞櫓（たもんやぐら）、女官たちが住む長屋の局門（つぼねもん）、外庭東門の方までひと目で見渡せた。きのうまでそこには、衛兵上番のたびに見馴れた表宮殿と奥宮殿があった。意外に近く多聞櫓や局門がみえたのに驚いた。上番では定められた道路を歩武堂堂行進せねばならないので、さすが宮城は広いとつねづね思っていたが、焼け野原となって直線距離で見れば、その近さに驚かされた。

その焼跡の皇子御殿と女官長屋の中間あたりに、一軒だけぽつんとコンクリート造りの平屋が焼け残って見えた。噂に聞いた皇后さまの御静養室と直感した。ご出産所とか産後の母子の休養室、お一人で静養される建物と聞いた。そこへは天皇はもとより近衛兵も近寄れない禁断の建物と教えられた。それとは別に古代の産室の名残

りと聞いた覚えもある。その当時車も通わぬ陸の孤島といわれた福井県敦賀市常宮の敦賀半島に古代の産室を見学に出かけた。四十年前のことだ。海岸の砂浜に粗末なわら小屋があって、広さ四畳ほど。半分が砂地の土間、半分がわら敷きで天井から一本の綱がたれていた。妊婦がその綱にすがって座りながらお産をする。御静養室が古代のそれと同じだと、誰かに耳打ちされた。

余談はおいて、その日の午後から焼跡整理が始まった。九中隊は守衛勤務で参加できなかったが、他中隊の話によると、皇后さまも女官たちと共に皇后御常御殿の焼跡整理にはげまれたという。モンペ姿でおでましになり、兵隊の先棒でもっこをかつがれ、御殿焼失にもめげず、女官とコロコロよくお笑いになっておられたという。また皇后さまは先棒をかついだ兵隊に、頭にかぶっておられた風呂敷を記念に下賜されたと、当の本人から直接聞いた。

最後に書き忘れたことがあった。燃えだした御常御殿の庭先で拾った銀の茶筒に入ったかき餅である。正規の衛兵勤務以外は、食事を供与しない宮内省の定めで私たちは連隊に帰ることになった。ところが蓮池通りから乾門は応援にかけつけた都内の普通連隊、都内消防関係者で溢れかえっている。聞けば憲兵隊が一人ひとり厳重な所持品検査を行い、宮城に入った記念に御物を持ち去るのを摘発しているという。これはまずいことになったと、近くの局門わきに人目につくよう置いてきたが、近衛兵だけは所持品検査なしで優先退出と知らされた。いまさら茶筒をとり返しにいくのも気がひけ、そのまま宮城を出たので、かき餅の香りをかいだだけ。

仲間にも打ち明けられず、終戦後なにかの話のついでに、けっこう元近衛兵の戦友が持ちだしていたことを知り唖然とした。考えてみれば、天皇が宮城内の水田でお手植えされ、収穫された米を賢所にお供えしたのをかき餅にされたとすれば、これはただではすまぬ。不忠の臣非国民にならずにすんだ——と胸をなでおろして、半世紀になるところである。

早春賦　七首

網干善教

花流る無常の雨に散る桜佐保川の水紅に染む

かみさぶる飛鳥の川の水上の瀬を流れ逝く水音静か

神人の籠りましたる水上の早瀬の渕は今も澄みけり

この水は何処に逝かむ飛鳥川古しえ激し波立ち流る

秋篠の川の辺にひらひらと舞ふ桜花歌碑に積りて

早春の川藻なびきて水清く桜桃に映ゆ飛鳥の川は

秋篠の川も温みて目高遊く川辺にありて早春の賦を

冬の旅

荒居智子

陶物を欲りし歳月遠かりき目を煌めかす娘を羨しみつ
中空に投げるスナックキャッチする鷗と吾等といずれが幼
捕え来て放りて遊び飽きし猫胤のつぶらな目が吾に向く
刻の止まるさまに静まる夕べにて林檎を割れば蜜すき透る
還暦の甥が再びの恋をなし結ばるるとや緋寒桜さく

飛鳥にて

石井光子

千四年の太古のままの飛鳥川小さき滝も風情をそへる
花びらの白きも混じる桃の花下ゆく女人(ひと)は乙女にもどる
復元の朱雀の門にひとり佇つ大極殿は遥かに遠き
激し雨に小川の鴛鴦肩よせて岩上に立つ長府のまちに
久びさに漬けし白菜塩勝るもシャキ〳〵と噛む歯ごたへの良き

近つ飛鳥

大浦　小枝子

触れたらば毀れむばかりの文庫本「古事記」は二度も戦地へ行きしと
東(ひがし)に三上山を西に淡海を見はるかすここ弥生人の住みし地
近江富士とふ三上山に弥生人は神を見しならむ祭祀遺跡並ぶ
痛ましき皇子の思ひ秘めし二上(ふたかみ)山は近つ飛鳥に見れば険しき
平石川を見下ろす棚田に埋もれゐしか近つ飛鳥の数多の古墳

春来たるらし

岡田　越子

桃の花菜の花活けて雛飾りやうやく吾が家も春来たるらし
提出日近づけど歌は浮かばざり床の間の花活け直したり
就職は思ひがけなく娘の意向に添ふ仕事らしうきうき出勤す
阪神のファンにあらねど余りにも勝ち進みしを横目で見つむ
「えっちゃん」と云はれて一瞬どぎまぎす小学校の同窓会に

夭桃の花

片桐一夫

いにしえの神々の名の長けれど「エリ」に聞かせおり21世紀の春
われ話す神々の名を慎しみて耳を正して「エリ」の聴きゐる（エリは犬の名）
弥生朝いまの社会をいにしえの懐かし貴人（きじん）と問答をする
幼き日正しく生きよと外祖母の訓（おし）えたまいし言の葉忘れず
美しき夭桃（ようとう）の花は上伸び枝に重なりて濃きもも色に映えて咲きおり（旋頭歌）

鈴廼舎

柏原英一

みすずかる信濃のくにのおおてらの民話浮かびく牛の土鈴
そとつまみそとうちふればからと鳴る伊勢松阪の鈴廼舎（スズノヤ）の鈴
「松阪の一夜（ひとよ）」のはたご跡ここと石のしるしにしのぶあの夜を
ホトトギスひとこえ告げよ鈴廼舎（スズノヤ）の大人（ウシ）にあの月あの日めぐると
息つめてシャッター切りし一瞬を追感しつつフォト展めぐる

黙黙と

木庭和子

目覚むれば足音熱く腫れて居り覚えなき罪問はるるごとし
きくきくと痛む足首なだめつつ降りゆく地下鉄階段長し
鳩尾にぽとんと落ちたるかなしみは溶けることなき塊となる
黙もくと庭に向ひて一人食む千六百カロリー満たすは辛し
これも又生きるちゑかも健忘症暗く悲しきは置き去りにして

線香花火

玉置小代

球をなし光をはなつ線香花火に集ふ幼ら大き声あぐ
幼らの花火遊びは見えしやと話しかけをり亡き母に向ひ
夜の明けて花火のなごり仕舞ふ上をあか蜻蛉(あきつ)とぶにほっと息つく
ペンの字も薄くなり来し亡母(はは)のメモ今年もたどりて盆の供養す
病癒えおもちゃ抱へて走りくる孫のほっぺを両手にはさむ

歩み

寺嶋　りくお

田舎より五歩も歩めば京に着く時空を超(こ)ゆる能狂言は
霧雨にしだれ桜の濡れそぼつそぞろ歩きの祇園白川
心わび歩む山みち冬ざれの暗峠(くらやみ)を越へて大和(やまと)へ
三キロを歩めど位置の変りなきわが人生かルームランナー
いにしへの人も歩きぬ歌姫の添(そふ)の社(やしろ)に幣(ぬさ)を手向けて

トルコの至宝

馬場　恭子

訪れし人の溜め息は巨大なるエメラルドへと吸はれてゆけり
惜しげなく宝石ちりばめし短剣はトルコの至宝今も輝く
帝王の生活ぶりの伝はりく絢爛と輝くターバンの飾りに
オスマンの馬に対する思ひ入れ見ゆ鐙にまでも宝石まばゆく
スルタンのシンボルなるかこの指輪にひときは目立つ金の印章

面影

福光貞子

朝靄の妹山すそに見送りし母のおもかげ温もり恋し
丸椅子に座りて我の好物の魚焼きたる母よ何処に
移り来し奈良の都は寒けれど居ませり母は隣の街に
白鷺の模様入りたる茶椀買い母を待ちたるクリスマスの宵
釈迢空籘くほどに幼き日「アララギ」語りし母の偲ばる

雨によせて

松村せつ子

雨の朝庭の若葉に息をのむグラスに受けたき緑のしづく
のんびりと煮物している時間(とき)も好き紫陽花いろに染まる雨の日
差し出した掌(て)に飛び乗りし雨蛙ひすい色した小さき生命
遠き日の夫の任地の懐かしき小雨にけむる長崎の町
雨の中急ぎ帰れば鍵持たず夫の帰りを待つ間の長し

平城山の空

森田陽子

今年こそ今を積まむと思う朝初日の中に三笠山はしずもる
その先は見えず舞い散る花の径　春の愁いを欄干に凭る
雨けぶる山陽道を過ぎゆけば新緑の野に桐の紫
乳拭きて永久の訣れを告げし日の母を思えり吾亦紅咲く
櫨赤く白銀の実の輝きて平城山の空　今真青なる

碧

安田和子

見上ぐればロマンに誘う朱雀門風鐸の音は清すがと鳴る
きぬ染むる料内に秘め桜木はきさらぎの空に朱き氣を吐く
土にまみれ発掘されし小さき舟曲水の宴の花形なりしを（平城宮跡東院庭園）
子供の日動物園は快晴でチビッ子天国吾は迦梨帝母
花は咲き花は散りゆき今は碧あおき木蔭に我は赤猪子

漢詩

片桐一夫

倭賁臨（弥生末期２８０年）

呉孫氏窃得民心　称魏後昆倭賁臨
璧玉住人皆敬仰　察知往事則丕欽

呉の孫氏窃に民心を得たり　魏の後昆と称し倭は賁臨す
璧玉の住人は　みな敬仰し　往事を察知し　則ち丕欽す

倭建国（古墳時代）

建国黎明總執中　呉孫文化浩然崇
渡來法網誠厳正　保護精神亦厚豊

建国の黎明は　総て執中し　呉孫の文化は　浩然と崇し
渡來の法網は　誠に厳正に　保護の精神も　亦厚豊なり

俳句

去年今年

牧野和代

おほかたは汗の重さの肌着脱ぐ
家路なる茅花の闇のゆれてゐる
片蔭や籠で運ばる玉の嬰
乾坤にひびく山田の鹿威し
朝影のわが頭小さし貝割菜
破芭蕉つくづく齢そびへたり
日のさして馬臭のつよき帰り花
しつとりと晴れて綿虫むらさきに
着ぶくれておどろきやすき麻痺の腕
ただ歩くことにはげみて去年今年

猫

上田善次

ふところの猫が顔出す冬日和
惜春や鶯張りを踏みならし
坐るより肱を枕の夏座敷
断崖に紅一点の初紅葉
墨でこそ描ける雪の白さかな

秋の蝶

上田千代子

咲き極む桜にかげのなかりけり
一枚の簾を吊って住みなれし
下駄の緒に翅を休めし秋の蝶
在所にて在所言葉や盆の月
散る程に掃く程に秋深まりぬ

寒念仏

岡良子

茶筌竹組みて干す野の花すみれ
知らぬ町歩く楽しさ冷素麺
子等に喜寿祝がれ松茸料理かな
山荘に人をおそれぬ赤とんぼ
対岸に白き一団寒念仏

木の芽越し

周藤智子

薬湯に浸りて申の年迎へ
受話器より風邪の声かと娘の問ふる
老犬のふとん干さるる小春かな
住まぬ家の黄梅凛と咲き満てり
仲良しの欠けて秋思の同窓会

春の鹿

南村照榮

卒寿の師オカリナ奏づ新年会
春雷の窓震はせて通りけり
春泥があれば幼なは踏みたがり
あてもなく地図を眺めて日脚伸ぶ
春宵や寄り来る鹿の目のうるみ

鮎

西田たまみ

ゆつたりと濠のある景春めきし
花の昼サンバ楽隊通り過ぐ
掛け替へて色紙の鮎の跳ねてをり
しみじみと日焼けの両手ながめをり
こほろぎや無口な夫でありにけり

散松葉

西山佐代子

日向ぼこ足音もなく迷ひ猫
綻びを直し直してちゃんちゃんこ
遠吠のいつしか消ゆる夜寒かな
高々と家紋の光る散松葉
沙羅の花若き院主の声涼し

自我

浜本るり子

麗かにだんだんゆるむオルゴール
野の花もかしこまりたる夏花展
炎天や泣く子のつかむ鹿煎餅
木槿(むくげ)咲く花ほどの自我持ち合はす
冬の夜スルメじんわり縮みをり

草摘

藤澤慶子

結界は断崖の上国栖の舞
早春の落暉生駒を前に押し
初手水和紙より淡き昼の月
「あゆあり」とはげた文字ある机かな
草摘の声は谷より湧き出し

立春の風

藤澤陽子

油照り握り鋏のあまくなり
天牛(かみきり)の鳴いて三等三角点
枯蟷螂おのが手足をいとほしむ
躾うちまで沁む立春の風なれば
たんぽぽと言ふ唇の小さかり

草清水

村上俊子

蹲にふやけて沈む年の豆
山菜萸の金ちりばめて雨上がる
春祭近し夜毎の稽古笛
青丹よし奈良の古道のつぼすみれ
せせらぎの水源ここな草清水

花の径

森田陽子

喜びも愁ひも秘めて古希の春
宮跡をそぞろ歩きて初桜
その先は見えず舞ひ散る花の径
五月晴松本城の鯉はねる
日照雨なか姉たずさふる吾亦紅

佐保川

吉田　佳寿子

百年を超えし盆梅力あり

佐保川へ落ち行く花の先しらず

マンションの影の中なり川氷る

山桜ふりしきる道下り坂

一面の霜の宮趾に人を見ず

グループからの便り！

歴史教養講座

寺嶋　りくお

有料の北部会館ができて、長い間、歴史教養講座などが利用して来たアカデミー館を追われることになりました。文化協会に入会し、三つ四つのクラブを掛け持ちしていた会員が、有料化に伴い一つ二つ辞めることになろうかと思います。特に十名前後のクラブの一人当りの負担が大きいので、会員が少なくなる心配があります。例えば、貧しい年金生活者の私などは、三つ入っているクラブの二つは辞めようかと思っている位ですから。恐らくこれで食パン二斤分は助かることになります。常々網干先生は、日本書紀やキトラ古墳の講議の中で「こんなことは知らなかっても生きては行ける」と言っておられますが、パンは食べなければ生きては行けません。

地域住民のために建てられた北部会館が、地域のコミュニティーと文化を弱めることになるのは、箱もの行政

の最たるものです。有料の講座が利用する、利用者の少ない会館になるのでしょうか。

今からでも、平城ニュータウン全戸に文化教会の活動をPRし、文化協会だけでも無料で北部会館を利用できるように署名活動をすればいかがでしょうか。PRによって会員が増えれば有料化は恐くないし、無料になればなお喜ばしいことです。

以前、網干先生は「帰宅時間、高の原駅から出て来る人たちは、皆な下を向いて歩いている。空には満月が輝いているのに」と言っておられましたが、リストラにおびえながら、サービス残業を余儀なくされている出費ざかりの勤労者には、満月にも感動することも少ないのだろうと思います。そんな人にこそ、歴史教養講座など文化協会の活動に参加していただき、地域とのつながりを育くみ、心の豊かさを取りもどしてほしいものだと思います。

あるいは、しわだらけの洗濯物を干している新婚夫婦。恐らく家事を知らないまま、二人の生活が始ったのだとは思いますが、文化協会のクラブに入れば勉強以外に心優しいベテラン主婦が、うるさいほど家事を教えてくれます。また、自分より五才、十才齢上の人たちの健康状態や生きざまを間近に見ることは、五年後十年後の自分を予見することができて、とても参考になります。ここは、ニュータウンの井戸端でもあるのです。五年前、ひとりで隠居生活に入った私が、痛感しています。

どうぞ、会員の皆様も、もっと若い世代にも、歴史教養講座を始め文化協会への参加をお勧めください。

表装の会

西村　従子

軸の楽しみ方

表装の会に入り、軸を作り始めて五年になります。

初めは工程を頭に入れるのが精一ぱいで失敗の連続でした。切り継ぎといって、本紙に一文字、中廻し、天、地の順に布を張り合せていくのですが、この組み合せ方で、同じ絵が全く違った作品に仕上るのです。頭の中で想像していた様に出来上る時よりも、意外性にかける喜びの方が強い作業です。

切り継ぎ作業は、子供の頃の着せ替人形遊びに似ていてとても楽しい時です。書画にどんな着物を着せようかいろいろ迷います。頭の中で考えた組み合せが、どうしても出来ない時、妥協するか、はたまた大阪まで布を求めに出かけるか、で二三日悩むこともよくあります。

その様にして、本紙に切り継ぎをした状態は平面ですが、床の間に掛けると立体となり、全く違った顔を出します。失敗に終ることもあれば、想像もしていなかった感じが出ることもあります。その一瞬に全神経すべてをかけている気がします。

最近では、どうしてもこの布裂を使って軸を作りたいと思って、それに合う絵を画くこともあります。父、母の着物地を使った軸は、作品の出来不出来よりも違った気持で床の間に掛けています。

軸の楽しみ方はいろいろあると思います。正月、節句、お茶席にと。私は自分の書画を自分の手で、工程、材料選び、を楽しみながら仕上げて、季節の移り変わりを楽しんでいます。

この様な機会にめぐり会えたことに、とても感謝しております。

パッチワーク研究会

島川　恵美子

研究会という名に恐れをなして（?）、どんな事をなさっているのかと、だいぶ思案をしていたのですが、昨年の文化祭でのステキな作品に感激、あれもこれも自分で作りたいと厚かましくお願いして、今年の二月から仲間入りさせて頂きました。

打田先生はじめ皆さんとても気さくで、親切な方ばかり、新入生としてドキドキしていたのも初会だけで、すぐに打ちとけてやる気満々です。

自分の作りたいものを自由にという事ですので、先生もひとりひとりに合わせてご指導、アドバイスと本当に大変だと思うのですが、にこやかにやさしく教えて下さるので、つい甘えて、色合せ等全てお願いして、私にもやっとポセットが一つ出来上りました。小さい物でも出来上った時の喜びは格別で、さっそく愛用しています。又、色々お話しながらのティタイムも楽しんでいます。

もし時間があれば一度覗いて下さい。そしてよかったら、ご一緒にパッチワーク始めませんか。

英語講座（初級・中級）

橋本　友子

初級英語講座として始まって三年目になりました。昨年から初級と中級の二クラスに分け、毎週月曜日の午前九時半から十時四十五分を初級、十時十五分から十一時半を中級としました。重複する三十分は一緒に英語の歌を歌っています。子どもの遊び歌やマザーグースなどから、ビートルズや懐しの映画音楽などまで、色々な歌を繰り返し、すっかり覚えるまで飽きるほど歌います。

初級は、中学一年生の教科書を使って、文字通りの初級からやっていますが、殆んどが会話文なのでロールプレイングを繰り返し、応用文で会話したり、詩を暗誦したりと、とにかく声を出して身につけることをめざしています。段々と大きな声が出るようになり、感情が自然に込められるようになってきました。その分進み具合は遅く、一年かかって、教科書の半分までしか終っていません。それでも、昔の教科書のように易しいものから順に難しい構文へと進むのでなく、会話が殆んどなので、難易とりまぜて出てくるので、相当難しいのです。今の子どもが早い段階（一年生の夏休み前まで）で英語がわからなくなっているという事情が納得できます。行きつ戻りつ、時間をかけて丁寧に繰り返し、繰り返し、やるしかありません。

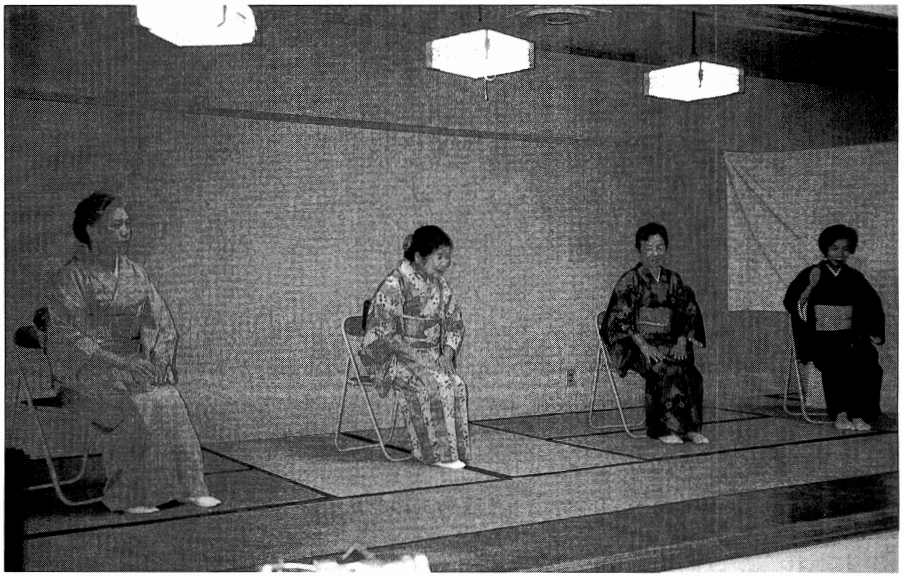
中級はリスニングの力をつけることを一番の目標にしています。二百語程度の短い文で、英語の落語といってよいような面白い落ちのある比較的易しいストーリーを毎回一話づつ、原則としてテキストを見ないで聞き、落ちがわかるか試してみます。その後でじっくり構文などを考えながら読んで設問も解いて、更に要約を自分の言葉で発表したりなどしています。落ちの面白さも文化の違いに由来していることがあったり、言葉の力の不思議さなど、学ぶ楽しさを講師自身も享受しています。

記憶力は見事に落ち、予習復習もおよそ期待できない年代でも、進歩や向上は必ずあり、新しいことを知る喜び、知的興奮を覚える幸せは、週一度でも続けていれば必ず味わうことができます。できない言いわけは限りなく持ち出すことができますが、一歩踏み出して、あなたも体験してみませんか。

手踊り同好会

毛利　八台子

——「傾　　城」——



——文化祭にて——

手踊り同好会も、仲間に入れていただいて、十年になりました。二千三年十一月三日の文化祭には、「ちゃっきり節」を踊らせていただきました。皆さんなじみの曲で好評でした。今年は、扇を使って手踊りしてみようと「酒よ」を練習しています。平行して普通に歌謡舞踊として「酒よ」も踊り、座っても、立っても踊れると面白いかなと思っています。

私事になりますが、日本舞踊飛鳥流「一葉会」の、十五周年舞踊会を一月六日に、学園前ホールで開催致しました。場所決めから、本番の踊り、打上げの懇親会まで、二十人程のメンバーで、何度も何度も準備会を開いて大変でした。四百人余りの方に観てもらい、何とか無事終えて、一山越えたかと、充実感を味わわせていただいております。手踊り同好会のメンバー、小森さんのお孫さん（林育子ちゃん）、文化祭でも何度か出演していただいておりますが「五條橋」義経に扮装しての大舞台でした。私は「傾城」おいらんに大変身して踊りました。

踊り、和服に興味のある方、いっしょに楽しみませんか。お待ちしています。

【写真説明】

「傾　城」――飛鳥華蓉（毛利公子）

「文化祭より」左から　山内　梅乃　毛利　公子

島川恵美子　小森美恵子

写真同好会

皆藤　甫

当同好会は、平城ニュータウン文化協会ニュースで、ご案内のごとく、毎月一回、第三土曜日、午前十時から十二時まで、平城第二団地集会所で、赤坐右一氏のリードで、月例会を開催いたしております。

月例会では、会員が写した写真を、２Ｌサイズに伸ばしたもの十枚を持ち寄り、展示し、いつ・どこで・どのようにして撮影したか、ねらいは何か、を説明し、出席の皆様に批評していただいております。自分では気付かなかった欠点を教えていただき、次回の参考にしております。又時には敢えて失敗作品を展示し、どうすれば、問題が解決出来るのか、教えを乞うこともしばしばで、技術の改善、向上に役立たせていただいております。

又、月一回の撮影会の日程・行先・目的を話し合って決めております。この撮影会が、大変楽しいもので、技術的にアドバイスを受けるだけでなく、皆さんと、わいわい喋りながら、浩然の気を養っております。

昨年の四月以降の撮影会は次の通りです。

◎四月六日　玉水　山背古道　地蔵禅院の枝垂桜
◎五月二十五日　京都植物園　バラ等草花
◎六月八日　馬見丘陵公園　風景・カキツバタ
◎七月十二日　草津市水生植物園　ハス
◎九月十五日　御所市葛城古道付近　風景・彼岸花
◎十一月二十二日　南禅寺・円山公園　紅葉
◎十二月十三日　京都梅小路機関車館・京都駅　風景
　　クリスマスツリー点灯
◎一月十一日　平城宮跡　若草山山焼き
◎二月三日　元興寺　節分会　火渡り
◎三月八日　二月堂　お水とり　おたいまつ

これ等撮影会作品に、その他自作品を加え、月例会で皆さんに批評していただき、これはと思うものを四ツ切サイズに引き伸ばし、半切の大きな額縁に入れて、秋の文化祭に一人、二～三点出展いたしました。こゝまでくると、色々とした努力、工夫が実り、いささか自己満足ですが、いゝ気分になります。

これも、一偏に同好会に入れていただいたおかげと感謝しております。文化協会員の方で、もっともっと写真をやりたいとお考えの方は、是非ご入会をお勧めいたしますので、月例会におこし下さい。お待ちしております。

筥作りの会

若原　和子

長年御指導いたゞいてきました中野先生が急にお亡くなりになり、その後今迄なんとか会をつゞけてまいりましたが、此の度、今迄の筥作りの会は、一応解散することになり、新たに新メンバーの集りで、第一歩からつゞけていくことになりました。

未熟な集りになることと思いますが、中野先生が天国で、頑張れとお声をかけて下さる様な気が致します。

過去に数多くの作品を作られた先輩の方々に、指導いたゞければさいわいに思います。

銅板レリーフ同好会

皆藤　るみ子

私が、銅板レリーフに出逢ったのは、文化祭で展示されていた作品を、見た事からです。

「右京ふれあい会館で、月二回、先生の御指導のもと、作品を作っておりますので、是非一度見学に来て下さい」とのYさんのおさそいで、仲間に入れて頂きました。

あれから六年経ちましたが、腕の方は一向にあがらず、自分で納得のいく作品が出来なくて、文化祭の度に、何を出品しようかと思うばかりです。

ホームセンターに売っている、0・1㎜の銅板が主材料です。図案をきめたら、大きさに合わせて切り、裏からふくらませたり、表から押したりしていきます。出来上ったらよく磨いて汚れを落し、入浴剤「ムトウハップ」を入れた水又は温水に入れ着色するのですが、この段階で失敗する事があり、私にとっては苦手の作業です。

現在は平城西公民館に場所を移して活動していますが、自動的に自主グループに入り、その流れの中で、公民館祭りに参加する事もあります。見学者の中には、入会を希望される方もあり、文化協会の趣旨をよく説明し、理解して下さった方に入会して頂いております。

現在、男性八名、女性五名のメンバーが、毎月二回、第一・第三金曜日、午後一時から三時迄、平城西公民館二階の部屋で全員仲良く、楽しい二時間を過しております。地区内の方の参加をお待ちしております。

一度のぞいて見て下さい。

先史学講座

片桐　一夫

層富のグループからの便りに先史学講座記事があり、No.17皆藤甫さん、No.18光岡祐彦さん、No.19清水昇さん、No.20奥村国男さんが、夫々に泉先生の地中海東岸の国々の考古調査の御苦労のことや、私達の勉強に対する御努力に対しての御苦労のことも、大変なことで私達一同、本当に感謝してゐる次第であります。

先生は是からまた、縄文時代を続けてやると仰しゃってゐますし、其が終れば弥生に進むのですから、私達も大変でありますが、私達の好きな弥生時代の先史学講座

の新しい勉強を教えて戴けるので喜んでゐます。

それは、先生が昨年の五月に配布して下さった縄文の弥生化の論文の最後のおわりに就ての「弥生時代は単なる食糧生産の時代ではない。水田稲作文化受容から千年もかからずに、人口の急増と階級の分化が進行し、自然発生的集落の崩壊から初期国家へと邁進する。入ってきた文化の高度さと、それを受け入れた人々のギャップが反って急激な発展を生み出したように見える」との文中の人口の急増について勉強したいのであります。

短歌を楽しむ会

福光　貞子

月例の「短歌を楽しむ会」は、今年四月二十日に第百五十回を迎えることに成りました。

当日は、朝からの雨も上り、ご多忙の内にも関わらず網干会長のご好意に依り、明日香村稲渕に在る、関西大学飛鳥文化研究所の一室をお借り致しまして、恵まれた環境の中での、楽しい勉強会を始めることが出来ました。

昼食を挟み、午前中は飛鳥研究所が、明日香の里に創設されるに至るまでの、詳しいお話と、先生ご自身から館内を、隈無くご案内下さった。

歌会に入り、何時もの習わしで、各自それぞれの思いを延べ合い、最後に先生より、短歌の「いのち」である美しい言葉をアドバイスして戴き、良き作品へと仕上げて行きました。

又午後には、吉野宮滝にまで通じていると言われる道を、飛鳥川の清流添いに散策を楽しみ、いにしえの歌人達に思いを通わせることが出来ました。

入会致しまして、一年に満たない未熟な作歌を、先輩達に交り、皆様の前で、詠み上げますことは、非常に勇気が必要と成ります。

顧みますと、私の場合、丁度四年前に、在宅介護から入院、そして別れと成りました亡き母への想いが、言葉と成り、綴り重ねて短歌と成って参りました。

今のところ、その中より一首一首を、添削して戴いて居ります。

順次廻って参ります先輩達の作品を、まだ〈〈高い位置で、批評が出来るまでには至りませんが、作者作品に好意を持って、どの点が、此の作品の生命と成って居る

上下とも　関西大学飛鳥文化研究所　植田記念館にて

のかを、奥深く、十分に考えることが出来ます様に、努力致し度く思って居ります。

尚、今後良き仲間達が、一人でも多く入会されまして、新しい邂逅に胸轟かせ乍ら、一歩一歩と前進致し、より楽しい会に、発展して行けることを願っております。

残留の　孤児と成らずに　生かされて
明日香の里で　歌会に集う

木目込み人形・押し絵同好会

谷口　直子

四月に入って、桜前線が上陸してきて一週間余り、よく晴れた日は忙しいのです。つまり桜探求の散策です。まずは大阪桜宮から毛馬橋迄、とぎれることなく続く淀川沿いの桜、阪急電車の窓から眺める桜並木、北千里の一戸建ての庭に咲く丹精された桜、家の近くの狭い公園の桜、そして圧巻は五、五〇〇本もの桜が、咲き揃う万博公園で、遠目には上部はピンクの桜、裾の白は雪柳、毎年同じ場所から見入ります。とても綺麗です。春の一週間あまりの間だけどこへ行っても、あっちこっちピンクに染まった桜を見つけることが容易に出来て、その数の多さの分いかに我々日本人が大好きな木と確認することが出来ます。皆同じ桜でありながら、種類も年数も植っている環境も異なっているので、枝ぶりも大きさも違い、さながら人に例えると、十人十色の個性と感じられ、眺めるに飽きないのです。

今年はもう一つ人形の仲間と、より趣のある桜を見る機会がありました。春の恒例の花見に、「二条城」へ行こうと決まり、京都大宮へ繰り出しました。唐門を潜って城内へ、一重の桜は花吹雪いていて、八重の木は花が手毬のように枝にまとまり、残念だったのは枝垂れの桜は三分咲きの花芽が、天から舞い降りてきたように綻ばせていたのが優雅で、満開の時を手描き友禅に表わすとしたら、絢爛とした雲状に絵描かれるのかしらと想像します。

見事な桜にしばし、声もなく見取れていたのは平成の我々、初めて徳川家から後水尾天皇に嫁したお松の方や、その時代の徳川家の将軍、幕末の新選組の隊員も警護の合間に、いずれの桜を愛でて堪能したのか、目線は咲き

綻んだ桜の花です。悠久の時を感じます。

短い命を桜にたとえて、昔は人生五〇年、今は八〇年、メンバーは皆、充分半世紀以上過ぎた方々、ご自分の人生を桜の花吹雪の下、危っかしい足元ながら、白足袋の足の運びは美しく、どう一差し舞うのでしょうか、興味が沸いてきます。限りある人生、人それぞれに囚われないで、自由に、どう生きてもその人らしいと思います。ただ限り無きほど細く、長く続けられる木目込人形、押し絵同好会であれば私の舞はより明るく、楽しげに表現出来ることでしょう。

押花を楽しむ会

西本　まゆみ

私の押花との出会いは、三年前の文化祭展覧会に足をはこんだ時でした。出品されていた押花の額や、小物に目をうばわれてしまい、私に出来るかしらと思いながらも、あまりの素晴らしさに、入会させていただきました。初めは、作品作りもさることながら、お花をきれいに押す事が出来ず、ずい分落ち込みましたが、毎回熱心な先生のご指導のもと、少しずつ押すことが出来る様になりました。

お正月用のミニカレンダーの色紙を初めて作った時の喜びは、今だに忘れることが出来ません。この頃はすこしずつですが、自分の考えで額を作ったり、色々なお花を押すことが出来る様になりました。お教室で新しい花と出会うたびに楽しみが増え、その一つは、花苗を買ったり、育てたりで、今我家の庭には以前になかった花々が咲いています。毎朝ながめるのが私の楽しみです。

又、ハイキングに行っても、今までは歩くだけだったのですが、野の花にも目が行く様になり、季節の移ろいを楽しみ、又、押花だけでなく和紙を使ったり、コンテ、ラメ、布と、色々な材料を使い一つの作品を作る楽しさもあります。

又、先生の前向きで、にこやかに毎日を過ごしていらっしゃるご様子に、人生の先輩として見習いたい事が多々あり、皆様のひた向な姿勢と、和やかな雰囲気の押花教室に出あえてほんとうにうれしく感じております。

押花を楽しむ会

21回の文化祭も多くの作品が出品されました。

中国語同好会

舩津　末年

中国と日本は同じ漢字の国。中国語を知らなくても筆談にすれば対話は出来るという話をよく聞く。日本に漢字が伝来したのは、四、五世紀の頃百済の王仁がもたらしたとされている。

「漢字」という文字は同じでも、長い歴史の中で変化し、両国で違った意味合いのものがたくさんある。私が中国語を始めたと聞いて、知り合いの、ある会社の重役が出向先の宴会の席で、「自分は酒豪だ」ということを言おうとして、「酒の鬼」と言ったら、みんな納得してくれたと自慢気に私に語ってくれた。なんと納得したんでしょう！　中国語では「酒鬼」は「飲んべえ・飲んだくれ」の意味で「鬼」は人をののしる言葉としてよく使われ、「強い」という意味はなさそう。こんなのはほんの一例で、日本の文字や文化の源泉ともいうべき隣国、中国を正しく理解するために、中国語を学ぶことは意義あること。中国語が一言でもしゃべれると、広大な中国を旅行する楽しみもまた一つ増えます。現在の会員構成

は数か月の留学経験のある人から、全くの初心者までさまざまです。勉強会ではなく同好会です。みんな仲良しになりましょう。

【写真説明】

天津から、右京団地に来られている李さんに、中国や中国の歌を教わり、日中交流をしました。

絵画の会

大台　雅生

今年四月より二年間、会の世話人を勤めることになりました。

会のメンバーは、以前に比し徐々に減少し、現在十名前後で推移しており、些か活気に乏しいのが実態です。

減少の原因は、転居や病気療養等による退会が主たるものですが、それに比し新入会が一向に増加しないことにあります。

昨年度は活動日を月三回から二回に整理する一方、活動内容を変化のある楽しいものを目ざし、討議を重ねましたが、方向を見出せず、いまなお模索しております。

どこの教室でも共通して悩むのは、毎回のモチーフをどのように設定し、創作意欲を引き出すかにあると考えます。

変りばえしないモチーフばかりでは、マンネリ化して飽きられるのは当然でしょう。

当会のメンバーは、長い人で数十年の画歴があり、平均して十年以上の経験の持主がそろっており、水彩、油絵、アクリル等に十分習熟して、決して他の教室に遜色はないと自負しております。

惜むらくは、これらのメンバーの才能、技量が会の活動の中で生かされず、特に新入会される会員に対し不親切で、折角の学習意欲と期待に十分応えていないことが、教室の不振につながっていると思います。

さらに出張所の会議室の使用が六月末で廃止と決定し、無料であった会場が使用出来なくなることは、会の運営に大きな影響を与えております。

しかし、私達の地域に根差す文化活動は、本来、自主、自立的であるべきで、すべてが援助や無料で可能とは決して考えておりませんが、どの程度の負担ならばメンバ

ーの理解と支持が得られるか、今後の活動のあり方を左右するでしょう。

新しい会場の使用料をはじめ、活動を多彩にするための教材費の充当等々、出費増にそなえた会の財源確立がいま、喫緊の課題となっております。

料理を楽しむ会

河合　智恵子

料理講習って、若い時には時々参加しておりましたが、知人から話をお聞きして料理を楽しみ、そしておいしく頂け、いい雰囲気のグループがあるのをお聞きして、年齢の事も考えず、お仲間に入れて頂きました。

息子一家と同居しておりますので、食事の用意は殆どしておりませんが、自分が欲しい旬の物等は時々作っております。

毎月その日の献立の選択は各々の旬の事を考慮され、それに対する色々な材料、料理の手順等はチーフの松村さんにお世話になっております。

時間になるとレシピに今日の献立表、そして材料、各々の分量、作り方等、細かく説明してあり、その手順に従って、皆各々一生懸命に手も、そして口を動かして料理に挑戦しております。

時には皆様の中で、お宅で出来た立派な野菜等も持参して下さり、一品、二品と増える事も屡々あり、季節に合った和・洋菓子も加わり、バラェティーに富んだ内容に感心しております。

参加して苦手な食品も、少し、頂ける様になりました。その一つは「納豆」なんです。殆ど口にした事もない食物です。家族の者は皆食べているんですが、私は駄目でした。でも「納豆のお焼き」、仕上げのソースが少し変った味付け（マヨネーズ、豆板醤、醤油、白胡麻）でおいしく頂けました。

又、乳製品も苦手の一つですが、ポタージュ、スープ等と野菜を使った料理方法で、だんだんと口にする様になってきました。

年齢の差はありますが、松村さんを中心としていい方々と出合え、料理を楽しんで、そしておいしく頂けるって、ほんとに幸せと喜んでおります。

料理を楽しむ会

新しい仲間も増えました。

読書会

木庭　和子

本を読むことが自然体で、身に付いた人たちがその月のテーマとなった本以外にも、時の話題の本を求め、あれこれ話し合う楽しい仲間です。年一回の〝文学散歩〟もお楽しみの一つ。中型バス一杯に、高の原駅前から乗り込み目的地まで、目を楽しませ、お腹も満足させ、お喋りもたっぷりと……と倖せな一日を過します。何処へ行くかはその年に読んだ本の中から、皆でガヤガヤ話し合って定めます。

さあ、あなたも仲間に入りませんか！。読書会に。

平成十五年度　読書会の活動

（〝読書会ノート〟より）

四月二五日　文学散歩　斎宮歴史博物館　松阪

「城のある町にて」　梶井　基次郎著

著者が、療養生活を送った「松阪」を散策。久し振りに純文学を読んだようで、すがすがしい気分になった。描写が詩的で美しい言葉使いに感動した。山内梅乃

五月二三日

「マークスの山」　高村　薫　著

「マークス」と自称する少年の特異な生い立ちと異常感覚に依る殺人鬼のような行為。それを縦糸に。現役の高級官僚、弁護士等がメンバーである名門の山岳倶楽部、警察の捜査部、等々複雑にからみ合って進展してゆくストーリーが少し読み辛い前半。刑事部屋の息づまるようなふんぬ気も興味深く、ユーモラスな描写もあり、読み進む程に、夢中になり一気に読めた。追いつめられた少年が最期の場所として選んだ北岳山頂。〝氷〟の人形となり陽光にキラキラ光っている描写が印象的である。数奇な誕生と幸薄く短かかった生涯に神が、愛憐の手を差しのべられたかのような……。　木庭　和子

六月二七日

「枕草子」　清少納言

松岡先生　講議

〈二七　心ときめきするもの。

〈四〇　あてなるもの。（高貴、上品なもの）
〈四一　虫は。

七月二五日

〈四二　七月ばかりに風のいたう吹きて。
〈一二五　九月ばかり夜一夜　降り明かしつる雨の。
〈一八〇　雪のいと高う降りたるを例ならず、御格子まゐりて。
〈一〇二　中納言、参りたまひて。

「藤原氏　皇室系図」よりのお話

岡田　越子

八月二二日

「終りなき祝祭」　辻井　喬著

奈良斑鳩の豪家に生れ、人間国宝にまでなった陶芸家富本憲吉と、「原始、女性は太陽であった」の平塚らいてうの同志として、女性解放運動に参加した妻一枝の生涯を、息子の視点から語られたモデル小説。李朝白磁を学び重厚であった彼の作風が、六十歳を過ぎて華やかな作風に変わったという、その作品を見に行こうという話等がでた。　鈴木　和子

九月二六日

「男の一生」上・下　遠藤　周作著

この小説の主人公は、豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎と言われていた頃から仕えていた「前野将右衛門」という武将である。

彼は、木曽川を命のふるさととも思っていた、朴訥で誠実な人間で愚直なまでに秀吉を信じ仕えていたが、やがて天下人となった秀吉に裏切られ切腹させられる。戦国時代を生きた大名、武将たちの動静、戦いの詳細な描写、そしてその時代に、翻弄され犠牲となった女性たちの運命など、とても読みごたえのある一大歴史小説である。さすがこの作家だなと思ったのは、当時のキリシタンのことも小説の中で重大な意味をもたせて書かれてあることだった。　西島　芳子

十月二四日

「錦繡」

あって話したのでは伝えようもない、心の傷十四通の手紙がそれを書き尽した。「前略、蔵王のダリヤ園からドッコ沼へ

登るゴンドラリフトの中でまさかあなたと再会するなんて、本当に想像すら出来ないことでした」。運命的な事件ゆえ愛しながらも離婚した二人が、紅葉に染まる蔵王で十年の歳月を隔て再会した。そして女は男に宛てて一通の手紙を書きつづる。往復書簡が、それぞれの孤独を生きてきた男女の過去を埋め織りなす、愛と再生のロマンである。　川端和可子

十一月二八日　文学散歩　大山崎～光明寺

テキストは？テーマは？……な固いこと云わずに、純粋？に無心に、サントリー美術館を。紅葉の庭園を楽しみました。

十二月二六日　「夏の庭」　湯木　香樹実著

この小説の著者は東京音大卒業の経歴の持ち主です。芸術は音楽と小説という異った分野にも、こんな素晴らしいセンスの表れるものかと思った。

小学六年生の男子三人、それぞれ複雑な家庭環境の中で、共通の目標（独り暮しの老人の観察）に向って友情を育てていく。子供らしい好奇心を輝やかせながら、ドキドキしながら老人の日常の行動を見つめてゆく。子供だからこそ興味を持ち純粋に行動出来るのだろう。大人はこんな風に目を向けないし興味も持たない。

やがて老人との交流、そして期待（？）通り死に出会う。おじいさんとの悲しい別れの中で、「でもオレ達、あの世に知り合いがいるんだ、すごく心強くないか」。少年達はそんな風に死を通して成長していく。今どきこんな少年達っているかな？　片岡　圭子

一月二三日　新春の集い　「マークスの山」ビデオ

会員の一人が、放映されていたものをビデオに撮っていらしたので、「皆で鑑賞しましょう」ということになり、眼福？と口腹の新年会となりました。

小説を読んで後、映画やテレビの作品

をみて、ガッカリすることが往々にしてありますが、これも正にその例で、何を表現したいのか判然としないストーリーに批判が集中しました。　西島　芳子

二月二七日

「天璋院篤姫」上・下　宮尾登美子著

外様大名の一支藩に生れた少女が、その聡明な資質をみこまれ、将軍の御台所となり、明治維新という大変革の時代を「大奥」の最高の地位に在って、みごとに生き抜いた物語りである。謂はば明治維新を裏から、女性の側からすかしみたような――篤姫の前を通り過ぎて行った維新の立役者が、彼女の目を通して描かれていてとても興味深い。テレビの「大奥」を観ていない私は、その華麗なさまも陰湿な人間関係も、小さな自分の中での想像でしかないが、宮尾氏の抜群の描写力に依り（少々わづらわし所もあるが）充分に楽しませられた。　木庭　和子

三月二六日

「ながい坂」上・下　山本周五郎著

徒士組の平侍の子として生れた主人公が、その強烈な自尊心と勝れた能力で、〝ながい坂〟を、全身全霊を傾けて歩み、登りつめて行った生涯が描かれている。

賢明で蔭のない主人公の生き方に、羨望の思いで読み進む内に、冷たく固いものに触れてギクリとする。それは「小三郎」と呼ばれた幼少時に植えつけられたものか？　身分の差に依って受ける屈辱の数々を、エネルギーに昇りつめてゆく過程で育てられたものか、両親に対する冷たさ、生れた我が子に対する関心の低さにも現われ、読者を少し反撥させる。

藩政の改革を一応成しとげた「三浦主人正」はふと半生をふり返り「これまでどれ程多く、人や大事なものごとに気づかずみすごしてきたかしれない……」そして「登りつめた今……もっと険しくさらにながい坂がのしかかってくる」――「そしておれは、死ぬまで、その坂を登

り続けねばならないだろう」と思惟する主人公にホッとして頁を閉じた。

木庭　和子

「続日本書紀」を読む会

吉田　治正

故鬼頭清明先生教導の「古代史講座」の後身である当会は、約十一年かけて平凡社刊東洋文庫中の續日本紀（口語訳文）をテキストとして巻廿三まで読み終り、平成十四年十一月から岩波書店刊新日本古典文学大系中の續日本紀の巻廿四以下を新テキストとし、その訓読み文を読み始めた。巻廿四に鑑真の物化と略伝記述があった。

平成十五年五、六、七月。淡海三船撰、東大和上東征伝（漢文）の海野昇雄現代語訳を読んだ。鑑真の五次に亘る失敗、遭難に挫折せず、遂に六次で渡日を果し、仏法の伝戒等の崇高な偉業を成就した、その経過状況を項を追って読み進み感銘を新たにした。

同年八月から十六年四月。巻廿五、廿六を読んだ。巻廿五は天平宝字八年（西暦七六四）正月から十二月までで、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱、淳仁天皇の廃帝淡路幽閉等の重大事件、諸国飢饉等の記述が多い。

巻廿六は天平神護元年（西暦七六五）正月から十二月までで、重祚した稱徳天皇の第二年、押勝の乱後の余震が続く不安国状が看取され、宣命（天皇の命令を国語体で書いた文。漢文による詔勅に対していう）が前年の大乱以来次々と発せられ、和気王の謀反、諸国飢饉、そして紀伊国、弓削寺等に行幸、道鏡に太政大臣禅師の位授与、出家者も奉仕する大嘗会の宣命等が記述される。

新テキストは、右頁に原文、左頁に訓読み文、下欄に注、巻末に補注があり、従前の口語訳テキストより原文に近く、また詳しく学び甲斐を感じさせる。しかし学がない上予習は一読のみで、参考書等で調べもしない私には、読んで意味の分らぬ所の時にある文でもある。この所を会場で気安く質問すると、渡邊さん、清水さんはじめ篤学の方々が、その部分を別書の口語訳文で読んで下さったり、解説して下さったりする。

續日本紀は、鬼頭先生が言われた様に官報的事項内容記述の文でもある。長く読み続けて学力を高められた会員が、新テキストを望まれたのはうなづける。宣命も右

頁の原文を見て、かような文体、用字、書き方のものかと分った。新テキストになって良かったと思う。

当会は現在二十三名。女性は原始会員、勉強家多く、男性は定年後が増え十五名になったが、和気あいあい気楽な読む会である。渡邊、清水、奥村さんら有志の、熱心で謙虚な奉仕によるテキストその他の準備、司会によって運営されている。怠け者の私には有難い会である。

俳句入門

牧野　和代

二十一世紀は、冷戦時代を終えて平和な時代が到来するかと予測したもの、、連日平和が脅かされる事件が起きていて未来に多くの不安を抱えています。

俳句入門は、俳句を通して人の心の安らぎを人の和をさらに平和な世をと願っています。

私の脳梗塞による後遺症は、まだ〳〵前途多難と思いやられるが、以前にまして体力に自信がもてるようになった。お蔭様で一度も休会することもなく、つゞけてこられたのは、会員の皆様のお蔭と感謝している。

そして、平成十五年は『平城山　四』を上梓するという大仕事を、編集委員の協力のもと、病とたゝかい乍らなし遂げることが出来たのは、何よりも嬉しいことであった。この拙いアンソロジーを前主宰牧野春駒の霊前にお供えし、五年に一度の約束を果し得たよろこびは、何物にも替えがたいものとなった。浄土より春駒主宰の更なるエールの声がきこえてくる。五年後の『平城山　五』を目指して会員は着々と句作りに励んでいる。

句会では各自の作句してきたものを、七句短冊に書いて出す、それを皆んなで手分けして清記する。その清記が次々とまわされ、その中からいゝと思ふ句を八句えらんで書出し、披講者に提出する。披講者によって自分の句が披講されれば名乗りでる。ところが自分の句が一句も誰の選にも入らないこともある。こんな時は非常に落込んでしまうが、これが次の句作りへのいい刺激となり、いい勉強になる。又はじめて自分の句が披講され名乗りをあげた時は恥ずかしいやら、感動するやら、この一瞬は一生忘れ得ないものである。またその場で席題と時間を決め即興をよむことがある。この時は、みな真剣に取組み精神統一のひとときである。持寄った句より、この

時に出来た句のほうがいゝ場合がある。

私の指導理念は俳句に上手下手はないということである。キャリアのある人も初心の人も句会ごとのスタートラインは、みな同じである。「あるがままを、あるがままに構えずにつくる」ことである。

私の師波多野爽波先生からは「多読多憶そして自由闊達に多作多捨を目ざせ」と教えられた。

俳句は、日記の一行詩であっていいと思う。それが生きている証であるからである。

生ある限り詩嚢をふるい立たせ、生きている証として作句をつゞけていきたいと思う。

フォーク・ダンスの会

片岡　圭子

三年前ずっと運動オンチだった私が、少し体を動かしてみようかなと思っていたところ、新しく文化協会にフォーク・ダンスの会が出来たので参加してみました。幸いな事に皆初めてという人ばかりで、ステップも、用語も解らず、無茶苦茶でしたが、先生は根気よくやさしく丁寧に何度も同じ事を教えて下さいました。今は難かしかったステップも簡単に踊れるようになり、特に全員が間違いなく踊れた時は、とっても嬉しく気持いいものです。

そこで、フォーク・ダンスについて、先生に教えていただいた事を書いてみました。

Ⅰ日本におけるフォーク・ダンスの歴史

我が国にフォーク・ダンスが紹介されたのは、明治十八年女学校の体育の一教科としてであった。明治二十四年には、小学校の戸外遊戯として、プロムナード、コントラダンス、マーチ等が紹介されました。現在のフォーク・ダンスは殆ど第二次大戦後、荒廃した日本において、老若男女を問わず急速に発展し、各地でクラブが誕生しました。

Ⅱフォーク・ダンスとは

一般的には、「その地域の住民の間に自然的に生まれ、或は他から侵入し定着し、その住民が親睦を深めながら伝承する、楽しい踊りである」と云われています。

ン文化協会第21回文化祭
記念講演「祭礼から見た

Ⅲフォーク・ダンスの特性

1自然性……自然に発生したもの。

2伝承性……住民の間に長く伝承されたもの。

3社会性……社会の中で集団的に生じたもの。

4素朴性……人間生活の底を流れる真実を持つもの。

5郷土性……郷土色の強いもの。

以上等があげられます。

最近は、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国の踊りを、どんどん掘り起し、フォーク・ダンスと共にリズムや、楽器も変り、グローバルに生きて行く必要があるようになりました。

皆で一つの曲を手をとって踊ることは、会話するよりも、親しくなり、楽しくなり、そして健康的です。

文化祭で、フィナーレを飾る私達のフォーク・ダンスを、是非ご覧になって下さい。

書道講座

田室　西崖

新たな書の可能性

最近の書道雑誌の書展紹介に、私はふと心を動かされました。

「志樹の会」という、まったく生活環境や生育暦の異なる四人の書のグループがあります。記事によれば、最近「21世紀・書の胎動展」と題する書展を開いています。開催の動機は、「現在の閉塞感のある書壇情況を何とか打開しよう」ということで、若い人たちが集まって仕事をしたようです。メンバーの一人、角紅苑さんは紅一点で、公募展暦はなく地元の水戸で個展を積み上げてきたようです。今回は「極光（オーロラのバリエーション）」をテーマに、墨象作品を出品しています。因みに墨象とは心象風景を墨で表現するので文字の制約はありません。岡村鶏守斎さんは新潟の熱心な書作家で、尾長鶏の飼育では知名だそうで、「小人はその肩書きを欲しがる」として公募展に出品せず、悠々と書画の世界に遊

んでいるということです。写真で見る作品は、骨っぽい破格の楷書で「角器円心」と大書しています。平野壮弦さんは書壇とはほとんど縁のない人ですが、２００２ＦＩＦＡ・日韓共同主催ワールドカップの公式ポスターに採用されて、一躍その名が知られるようになったようです。「書はもっと社会の中で生かされるべき」との強烈な主張をしています。抽象的な書表現が得意のようですが、今回のパフォーマンスでは、三人のモデルに新潟産の和紙で作った衣装を着せて、音楽に合わせて踊りながら書くのが話題になったとのことです。木原光威さんは一番若く、現代詩を素材に詩情のある書を書いています。

この人たちは書作品のほかに、回転式の行燈、陶芸、インテリア風の屏風、Ｔシャツなども並べて即売もして、なかなか好評だったようです。

現代社会の高齢化は、書壇といわれる社会にも顕著に現れていますが、日展をはじめ、読売・毎日のような既成の全国展など、順番や段階があって、審査員に名前を認められるのに何十年もかかるというのでは、若い人は参加しません。ただ、毎日展の企画部がサッカーになぞらえた「Ｕ２３展」の企画や、大阪の国際高校選抜書展「書の甲子園」には毎年数万人の学生が出品しています。評論家の田宮文平さんはこの間の事情を、ここには書壇的な制約がないからだと論評していますが、一面では当たっていると思います。

また、最近の大学の書道専攻科の卒業生の動向を見ると、既成の書壇のシステムに早くから参加する人のいる一方で、既成書壇外で活躍する人も存在します。かつて著名な書家であり、大学教授であった故松井如流氏、熊谷恒子氏、大河内鳧東先生、安達嶽南先生などは、在学生を決して自らの門人にはしないという節操がありましたが、今は大学の教授間で学生の奪い合いをするような現象があるやに聞きますが、最高学府も地に落ちたものだと思います。

何はともあれ、「志樹の会・２１世紀書の胎動展」のような新しい可能性が陸続と生まれることを期待して止みません。

園芸の会

北村　孫衛

園芸も、パソコン、ケータイ同様に進化の著しい産業である。本来農業の一分野だったものが、大量生産、大量消費の波の中、西欧のどこよりも安い花付苗に恵まれて、お小遣いで、少い年金生活にも彩りと限りないよろこびを与えてくれる稀有な趣味であります。

この花作りの楽しさを共有する手だてとして、同じ植物を皆んなが育てようと、例会参加者に、毎月、花苗を差上げているのです。一年間を振り返ると、

四月　ルドベキア苗、嵯峨菊　他
五月　斑入白紫菊　他
六月　嵯峨菊、アジサイ　他
七月　オミナヘシ　他
八月　白鷺かやつり　他
九月　寒咲花ナタネ、ネリネ　他
十月　見返草、紫大根草　他
十一月　ヤブミョーガ、桜草　他
一月　園芸よもやま話で、お茶を一服
二月　吾亦紅苗
三月　半夏生　他

むすび――アト五名、花作り好きの人どうぞ。

詩吟の会

S・一

文化協会の「高の原吟詩会」は、春風流に属し、午前の部と午後の部にわかれておけいこをしています。

講師は吉本先生御高齢につき、現在は西尾弘子先生に御指導願っています。

皆さん熱心で、毎年ある春風流競吟会でも、優賞者が出るといった実力をもった人が多くいらっしゃいます。

入会御希望の方は、まずはお気がるに見学なさって、御入会下さい。お腹から声を出す事は健康にいいですよ。

「No.1」の写真は、昨年秋の文化祭の時の合吟の様子です。

「No.2」の写真は、アカデミー北部出張所会議室での、午前の部のおけいこの様子です。

No.1

No.2

萬葉講座

吉田　治正

松岡禮一先生主宰の本講座は、平成十六年四月開講一五周年を迎えた。その間先生は自らテキストを作成、複写し、熱心に講義を続けてこられた。素晴らしいテキスト、有意義且つ面白い講義なので、受講者は三五名もある。歌心の全くない私は尻込みしていたが、石川さんの勧めで先生にお願いし、昨年三月受講生になった。

初出席時先生から、藤原宮から寧楽宮への遷都その他の長歌一首、短歌六首のテキスト一四枚を頂いた。

長歌は四段組で上から、現代読み下し文、原文、通訳、語訳に分けられ、その後に注と参考として諸学者の評が挙げられ、短歌は四段組を除き前同様に記述された、創意工夫に富む懇切詳細なテキストであり感心した。

このテキストで二回にわたり朗読、解説、鑑賞のほか藤原京から寧楽京への水路、陸路等の説明があり、受講者を交えて何故藤原京僅か十数年で苦難多大の遷都が急がれたのかと意見が交されるなどした。

その後この四月までに、更にテキスト五二枚を頂いた。そして同月まで六回にわたり、そのうちの

穂積皇子の恋歌

家にありし　櫃に鏁さし　蔵めてし
恋の奴の　つかみかかりて　ほか悲傷の一首

その恋人但馬皇女の激しい恋歌

人言を　しげみ言痛み　おのが世に
いまだ渡らぬ　朝川渡る　ほか二首

常陸娘子の恋歌一首、大伴宿奈麻呂の恋歌二首

高橋虫麻呂の筑波山に大伴卿の登りし時と憂い慰める登山の時の各歌、霍公鳥を愛しその特性を詠む歌、嬢歌會の習俗を素直に詠む歌、水江浦島子を詠んだ歌、計長歌五首、反歌五首

更に丹後風土記の浦島の子の説話などが順次講義され楽しく学んだ。

毎回の講義は朗読、解説、鑑賞のほか発音の時代的変化、文法、漢字の古文字とその象形、象意等に触れて明るく面白く進められ、受講者も気軽に質問されている。私はただ聞くだけの能しかないが、受講して良かったの思いを強くしている。

本講座は松岡先生の絶大なご厚志に甘えて成立ってい

る。受講者は先生のご労苦を偲び感謝しつつ、講座がご無理のない範囲の方法で、末長く続くことをこいねがっている。御高齢の先生のご健康をお祈りする。

地酒を味わう会

松本　敏夫

毎年、12ずつ回を重ねて5月例会（8日、右京「パザパ」）で第235回となります。ご多分にもれず、我々の会も平均年齢は上昇一途ですが、昨今の世相と反比例するかのように元気で明るい雰囲気で盃を交わしています。文化祭以降の例会の模様を報告しますが、毎回の美酒佳肴の味・香りやライブ感をお伝えできないのが残念……。

03年10月には、三条通の「梁山泊別館」にゲストとして生駒・菊司醸造の駒井大氏、あやめ池・山崎屋酒店の野依氏を迎え、地酒の造り手と売り手と飲み手の三者が一堂に会しての例会となった。「花垣」「独楽蔵」「力士」など飲んだ。17人出席。11月は地元開催。右京「はな膳」にて「風の森」「花巴」など。25人出席（うち女性11人）。12月は恒例の忘年会をいつもの般若寺前「御逢詞巣」で21人の出席。「日高見」「黒龍」「メ張鶴」など。

年が明けて04年1月、県庁横の「天平倶楽部」にて新年会。てっちりコースで「麓井」「磯自慢」などを飲み歓談。純米吟醸のにごり酒「春一輪」がさわやかな旨さだった。2月は寒造り、酒蔵見学。秋に約束した生駒の菊司醸造を訪ねた。小さな蔵ではあるが酒造りに対する情熱が駒井氏の吐く息からも伝わってきた。夜は奈良に戻って「梁山泊別館」で16人の出席。「真澄」「琵琶のさざ浪」などを味わう。

3月には代替わりはしたものの新大宮「御船」で3年ぶりとなる焼きふぐ&てっちりで「奥播磨」「楯野川」などを飲んだ。16人出席。4月はニュータウンに戻って神功「ならのは」にて和風料理で盛り上がった。「東北泉」「王禄」などを飲んだ。20人出席。

例会で飲む酒は純米か純米吟醸酒。会費は三千円から五千円。毎月第2土曜日6時半より。連絡先は松本☎0774-73-8184。

梁山泊別館にて　03.10.11

酒蔵見学「菊司醸造」にて　04.2.14

……歩く会

廣田　省吾

私が「……歩く会」の窓口を引き継いで丁度十年になります。此の十年間の歩いた個所は四十カ所以上になりました。よくも歩いたものだと驚いています。

普段は通り過ぎている駅に「……歩く会」に参加して、初めて降りたという人もありました。

平成十五年度は左のように歩きました。

四月二十七日（日）晴　上町台地の高津の宮から北へ、難波宮跡迄の二回目

上町台地のビルとお寺が並ぶ中に肩見が狭そうに立つ近松門左衛門、井原西鶴のお墓。豊臣と徳川が争った大坂冬の陣で徳川方を大いに苦しめた真田幸村の出城があったと云われる真田山公園、隣接する宰相山公園には大坂城に通じると云われる抜け穴の入る口があります。

森ノ宮の労働会館の展示室には、ビル建設中発掘された縄文中期から（約四五〇〇年前）弥生・古墳時代、江戸初期頃の複合遺跡の土器や石器が展示されています。法円坂から馬場町の一帯が難波宮跡です。大正時代陸軍被服支廠の工事現場から奈良時代の二片の古瓦が出土し、それが端緒となって難波宮跡が確認されたという。奈良時代から難波の宮、更に江戸時代の狭間を歩く事が出来るのは現代だからでしょうか。最後はＮＨＫ大阪を見学。（参加者十名）。

五月十六日（金）曇後晴　国立国会図書館関西館見学

私達が住む平城ニュータウンの隣、精華町に立派な国会図書館関西館が開館されたというので見学に行こうと、「……歩く会」で募集したところ、多数の応募がありました。図書館では受け入れ人数に制限があり、二班に分けて行く事になりました。「……歩く会」主催で近鉄高の原駅から国会図書館まで歩くことにしました。一部の人はバスで先に到着されていました。開発された丘陵の関西文化学術研究都市の一角に、ガラス張りの四角な威容を誇って立っていました。先ず図書館の若い館員の案内で各館を見学しました。今建っている国会図書館関西館は、現在、収蔵数は三百二十万冊、能力は六百万冊迄、将来は別棟を建設し、収蔵能力は二千万冊を予定

国会図書館

しているとのことです。採光と室温には科学の粋を集め、図書閲覧室はとても地下一階とは思えぬ柔らかな明るさと、快適な室温は閲覧者に素敵な空間を与えています。(参加者三十一名)。見学後、六名は徒歩で近鉄山田川駅を経て高の原まで帰りました。

六月三日(火)晴　国立国会図書館関西館見学の二回目。午後から実施。(十四名)

七月・八月　お休み。

九月十九日(金)晴　三月と四月に上町台地から北へ歩いたので今回は南へ、生國魂神社から、それぞれ親しみを込めて愛称で呼ばれる坂を巡り、一心寺から四天王寺までを歩くことにしました。

谷町九町目の地下鉄の入り口近く、藤次寺と云うお寺があり、別名、〝融通さん〟と呼ばれて、困ったときにお参りすると融通の道が開かれると云われています。

南西に行くと生國魂神社があり、下寺町と呼ばれ寺院が並ぶ此の周辺は、通称、南と呼ばれる難波周辺と、天

王寺との繁華街の間にあって静かなたたずまいを残している。生國魂神社から南へ坂が並んでいる。

先ず「源聖寺坂」、「学園坂」、（蛇くちなわ）を連想さけるところから付けられたという「口縄坂」、『口縄坂は寒寒と木々が枯れて…』と刻まれた織田作之助の文学碑が建っていました。愛染さんの名で親しまれている勝鬘院（しょうまんいん）と並ぶ、大江神社の横の急な坂を「愛染坂」、市内で滝のある寺と知られている清水寺のある坂を「清水坂」、菅原道眞を祭っている安居神社の北側の坂を「天神坂」、一番南の坂を逢坂と呼ばれています。これらの坂を巡り、お骨で仏様を造られるので知られる一心寺は、何時もお参りする人達で賑わっていました。今日の「……歩く会」の最終地の四天王寺へ、聖徳太子が創建したと云われる此のお寺は、「四天王寺式」と呼ばれる伽藍配置に大きな特色をもっています。新しく建てられた木の香の漂う、信徒待ち会い所で、やや遅い昼食。回廊内の講堂・金堂・五重の塔を拝観、近くの庚申堂を通りJR天王寺駅へ。賑やかな大阪の街と違う大阪の歩きでした。（参加者九名）。

十月二十六日（日）晴　上町台地（下寺町）から四天王寺までの二回目。（参加者八名）

十一月二十一日（金）曇時々晴　京都府大山崎町、大山崎山荘から天下分け目の戦いで有名な天王山へ。JR山崎駅で下車。先ずは、クロード・モネの「睡蓮」で有名な大山崎山荘美術館へ。加賀と云う関西の実業家が建てたとのこと。昔の実業家は桁外れだったことを実感し、山荘所有のモネの睡蓮を鑑賞し、標高二七〇㍍の天王山への途中、展望台から桂・宇治・木津の三川が望まれる場所で、昼食。更に頂上へ、「ふーん此処が天下分け目の戦いで取りあったところか」。

帰りにサントリー山崎蒸溜所へ。天王山の新緑を背景に、清潔な工場と静かに年代別に眠る膨大な量のウイスキーの樽。工場見学の最後にウイスキーの美味しい飲み方とか、山崎十二年と云うウイスキーをベースにした、此れも山崎から湧き出た名水で作った水割りを試食して御機嫌の方もおられました。

今日の「……歩く会」の最後はJR山崎駅の近くの油の神様と云われる離宮八幡宮にお参りして終了です。

大山崎町
大山崎山荘の庭先にて

（参加者十一名）

十二月、平成十六年一月、二月、お休み。

三月二十八日（日）晴　大山崎町。大山崎山荘から天王山への二回目。今回は今年の桜が早咲きだったので、大山崎山荘の桜の下での食事。思わぬ花見が出来ました。

（参加者十六名）

「……歩く会」の平成十五年度も無事歩くことが出来ました。参加下さった皆様、有り難う御座いました。

十六年度もこの「層富」が出る頃は、どこを歩いているでしょうか。其の時も、楽しく皆様と元気で歩いていたいものです。どうか、皆様のご参加をお待ちしております。

又、又、又、お願い。楽しく歩く道があれば教えて下さい。

観月の夕べ

（十六夜）
（15・9・12）

第21回 文化祭記録

展示の部

第一期　十月二十二日（水）～二十四日（金）

◆絵画　梶野　哲　石川　和子　上田　善次
大台　雅生　小西　淑彦　込山　嘉代
高橋ゆかり　西村　通弘　広田　省吾
山崎　明　山田ツル子　伊東　勝己

◆銅板レリーフ　込山　博介　稲田　善彦　皆藤るみ子
杉田　英二　谷口早智子　岸下　啓子
中村　一郎　山崎　明　山田　正
近藤　昭英　藤沢　陽子　森下　幸雄

◆木目込人形　谷口　直子　網干佐和子　石森千代子
押絵　奥村　淳子　北　アサ子　島田　守恵
杉村　瓔子　杉山　安枝　長柄　清子
東山　幹子　御手洗敦子　森本　登子
山下　彰子　鷲塚　順子　西田　昌子
幸路　喜代

第二期　十月二十五日（土）～二十七日（月）

◆短　歌
網干　善教　荒居　智子　石井　光子
大浦小枝子　岡田　越子　柏原　英一
片桐　一夫　木庭　和子　玉置　小代
寺嶋　勃雄　馬場　恭子　松村せつ子
森田　陽子　安田　和子

◆篁作りの会
赤井美津子　秋山　静　新司　輝江
櫟原千鶴子　岡田　越子　幸路　喜代
杉山　啓子　若原　和子

◆園　芸
北村　孫衛

◆パッチワーク
打田　照子　櫟原千鶴子　井本　市子
幸路　喜代　鈴木　幸子　吉川　普子
若原　和子　菅　千尋　住吉　紀子
新司　輝江　堀部　澄枝

第三期　十月二十八日（火）～三十日（木）

◆俳　句
牧野　和代　上田　善次　上田千代子
岡　良子　込山　山歩　周藤　智子
多田　文子　辻田しま代　南村　照栄
西田たまみ　西山佐代子　藤澤　陽子
堀池　敏子　森田　陽子　吉田佳寿子
村上　俊子　麻生　利子

◆押し花
広崎　光子　伊藤　京子　井戸八穂子
宇野木久代　岡島　恒子　奥谷　敏子
木村　絢子　鈴木　幸子　杉山　安枝
住吉　紀子　椨　鈴子　南村　照栄
西田　安代　野原　雅子　西本万優美
松村せつ子　御手洗敦子　山中優美子
若原　和子　徳永美智子　吉田　敬子

◆表　装
西島　芳子　石井　英治　岩坪　昇
大橋　芳子　西村　從子　水野　繁三
山本　康彦　岡本　一枝

第四期　十月三十一日（金）～十一月二日（日）

◆写　真
赤坐　右一　伊藤　昌一　伊藤　嶺里
大迫くき枝　皆藤　甫　菊地　俊一
北側　勝　北原　吉雄　志智　英子
田中　利忠　寺嶋りくお　西口　義朗
野原　雅子

◆書
田室　西崖

◆地酒の会　写真・日本酒ラベル

上演の部

◎ 日　時　二〇〇三年十一月三日（祝）

◎ 会　場　北部出張所会議室

◎ 主　催　平城ニュータウン文化協会

上演

1）箏曲

「湧きいづる力」／衛藤　公雄作曲

第1箏　田頭雅千香・冨田　珠美

第2箏　南湖雅千紗

第3箏　比良　尚美

17絃　菊池雅千絵

「ジプシーの唄」　棚橋　愛

「鷹」／澤井　忠夫作曲

ぐるーぷ翔ジュニアの小・中学生

第1箏　田中　佳奈・棚橋　優

奥谷　明香・河内麻友子

第2箏　棚橋　愛

2）詩吟　一三時三五分　詩吟の会

コンダクター　西尾　弘子

吟題	作者	吟詠者
九月十三夜	上杉謙信	独吟）宗徳　郁雄
白帝城	李　白	独吟）高松美枝子
寄家兄言志	広瀬武夫	独吟）周藤　吉雄
峨眉山月歌	李　白	連吟）岩井　静枝 西脇　岑子
名槍日本号	松口月城	舞）香川サワノ 吟）高木紫司江
出郷作	佐野竹之助	独吟）木村　麻子
稗搗の歌	松口月城	連吟）杉田　英二・花田　清美 西村　諄輔・増井　公道
万葉・望国の歌	舒明天皇	独唱）堀部　澄枝
題常盤抱弧図	梁川星巌	連吟）花田　克子 山道　慶子

近江八景　大江敬香

連・合吟）西尾　弘子・香川サワノ
木村　麻子・岩井　静枝
西脇　岑子・堀部　澄枝
高木紫司江・山道　慶子
増井　公道・西村　諄輔
周藤　吉雄・杉田　英二
花田　克子・花田　清美
宗徳　郁雄・高松美枝子

3）舞踊　一四時一〇分　手踊り同好会

手踊り「ちゃっきり節」毛利　公子・小森美恵子
島川恵美子・山内　梅乃
歌謡舞踊「霊峰富士」　久門　冨美
大和楽「浮かれひょうたん」山内　梅乃
大和楽「舟」　毛利　公子（飛鳥　華蓉）

4）クラシックギター演奏　一四時四〇分

村上　和子と中村　昭三

曲　目

2重奏　二つのギターのための変奏曲
ロンド
独　奏　エンカントと思いでのメロディー
なつかしのアランフェス協奏曲

5）英語で歌いましょう　一五時　初級・中級英語講座

曲　目

「Beyond the Reef」「Autumn Leaves」
「El Condor Pasa」
「The Farmer in the Dell」

橋本　友子
村上　寛子・新司　輝江・島川恵美子
山内　梅乃・片岡　圭子・松村せつ子
高岡　文子・熊田てる子・鈴木　時子
堀田　幸子・福井　和子・谷口　道子
中務　明美・田中真理子・高松三枝子
西尾　弘子

6）フォークダンス　一五時二〇分　フォークダンスの会

曲　目

1）マイム・マイム（イスラエル）　シングルサークル

2）プログレッシブ・バーン・ダンス（イギリス）　ダブルサークル

3）大阪ラプソディ（レクリエーションダンス）　ダブルサークル

4）テネシーワルツ（アメリカ）　ラウンドダンス

5）オールアメリカン・プルムナード（アメリカ）　ダブルサークル

宮川恵美子

片岡　圭子・玉置　小代・打田　照子

木庭　和子・住吉　紀子・橙　公栄

馬場　恭子・松村せつ子・松田　輝子

宮崎　滋子・森岡きみえ・若原　和子

湯川　博子

2004年（平成16）年度

第22回平城ニュータウン文化協会総会

と　き　2004年５月23日(日)
受付　午後１時より
開会　〃　１時30分
ところ　北部出張所会議室

◇平城ニュータウン文化協会総会次第　　午後１：30～２：15

Ⅰ　開会の辞
Ⅱ　会長挨拶
Ⅲ　来賓祝辞
Ⅳ　議長選出
Ⅴ　議　　事
　(1)　2003年度事業報告
　(2)　2003年度会計報告・監査報告
　(3)　役員改選
　(4)　2004年度事業計画
　(5)　2004年度予算
　(6)　その他
Ⅵ　閉会の辞

◇第22回総会　記念講演　　午後２：30～

『最近発掘の飛鳥成果』

講師　網干　善教（関西大学名誉教授）

懇 親 会　　午後４：00～

２００３年度事業報告

2003年４月１日　ニュース１号発行

５月１日　協会報発行　全戸配布

18日　第21回（2003年度）総会
記念講演『最近出土の暦の木簡について』
講　　師　網干　善教先生
18日　懇親会（出席者有料負担）
23日　ニュース２号発行
６月14日　セミナー「地図が語る歴史」野崎　清孝先生
８月１日　ニュース３号発行
31日　常任理事会
９月12日　観月の会
10月１日　協会報発行　全戸配布
ニュース４号発行
20日　「層富」20号発行
22日～11/２日　文化祭作品展示会開催
22日～24日　絵画、銅板レリーフ、木目込み人形押し絵
25日～27日　短歌、筥作りの会、園芸、パッチワーク
28日～30日　俳句、押し花、表装
31日～11月２日写真、地酒の会、書
11月３日　文化祭記念講演「祭礼から見た奈良の文化」
講　　師　浦西　勉先生
３日　文化祭上演会
詩吟、舞踊、箏曲、ギター演奏、英語講座、フォークダンスの会
３日　ごくろうさん会
７日　ビーズアクセサリー講習会　住吉　紀子様
11月８日　地区センター建設促進委員会
13日　地区センターについて市社会教育課・高齢福祉課陳情
31日　地区センター建設促進委員会
2004年１月１日　ニュース５号発行
11日　右京・神功「新春を祝う会」参加
12日　朱雀・左京「新春を祝う会」参加
17日　セミナー「イタリアのちいさな町」
講　　師　光岡　祐彦先生
２月１日　役員会
ニュース６号発行
20日　ビーズアクセサリー講習会　住吉　紀子様
３月５日　セミナー「植物雑話」
講　　師　光岡　祐彦先生
３月27日　理事・常任理事会

2003年(平成15年)度決算報告

平成15年４月１日～平成16年３月31日

【収入の部】　　(単位、円)

項　目	予　算	実　績	増　減	備　考
前年度繰越金	113,626	113,626	0	
会　費	540,000	490,500	△49,500	@1,500×327人
後援費	70,000	70,000	0	各自治連合会、自治会
戻　入	0	6,000	6,000	助成金戻(筒作りの会、山歩きの会)
寄付金	10,000	52,000	42,000	講師お礼戻り
雑収入	374	500	126	銀行利息　他
合　計	734,000	732,626	△1,374	

【支出の部】

項　目	予　算	実　績	増　減	備　考
事業費	70,000	50,000	△20,000	文化祭、セミナー等
助成金	78,000	78,000	0	講座同好会@3000×26
会議費	10,000	2.235	△7,765	会議、資料、他
広報費	380,000	373,708	△6,292	会誌、会報、ニュース
事務費	20,000	10,889	△9,111	事務用品、他
印刷消耗費	80,000	79,380	△620	コピー機消耗品
通信費	4,000	1,890	△2,110	郵送料
渉外費	10,000	8,000	2,000	協賛費他
雑　費	10,000	8,195	△1.,805	項目にない出費
予備費	12,000	0	△12,000	
積立金	60,000	60,000	0	特別会計繰り入れ
小　計	734,000	672,297	△61,703	
次期繰越金		60,329	60,329	
合　計	734,000	732,626	△1,374	

特別会計　南都銀行スーパー定期　¥395,600(平成16年３月現在)
備　品　コピー機一台　LEODRY2540

会計監査報告
平成15年度の、会計帳簿証票類他関係書類等を精査した結果適正であることを認めます。

平成15年度　５月　15日　　監事　東　叡　㊞
〃　西村　美佐子　㊞

２００４年度事業計画

はじめに

当「協会」は、地域での日常的な文化活動を通して、地域コミュニティー・住民の親睦と和を実現していくために、当時の自治会・連合会の「街づくり」の方針のなかで結成推進されてきたものです。

この設立趣旨にそって、地域住民の多くの方の、参画を期するとともに、会員の研究創作発表、相互の交流などの場としつつ、地域文化の発展に、寄与することを基本としていきます。

また地域四自治連合会をはじめ、スポーツ協会、教育懇親会、地区社会福祉協議会などの各団体の活動とも提携して、ひきつづき「街づくり」に貢献していきます。

おもな計画

1　講演会の開催　　総会記念講演
　　文化祭記念講演
2　セミナーの開催
3　会誌『層富』の発行
4　会報の発行（全戸配布）　文化協会案内号
　　文化祭　案内号
5　ニュースの発行（隔月発行予定）
6　大和路見学会　　春１回
　　秋１回
7　文化祭の開催
8　観月の夕べの開催
9　年間を通じて趣味の講座開催
10　その他
　会の発展を期しての工夫など会員各位の、提案、役員会決定などにもとづき適宜事業を推進したい。

2004年（平成16年）度予算

【収入の部】　　（単位、円）

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	60,329	
会費	450,000	@１５００×３００人
後援費	70,000	各自治連合会、自治会より
寄付金	10,000	
雑収入	671	銀行利息他
合計	591,000	

【支出の部】

項　目	金　額	備　考
事業費	70,000	文化祭、セミナー他
助成金	0	
会議費	10,000	会議、資料、他
広報費	370,000	会誌、会報、ニュース他
事務費	10,000	事務用品
印刷、消耗品費	80,000	印刷機器消耗品、コピー
通信費	3,000	郵送料
渉外費	10,000	協賛費等
雑費	20,000	各項目に該当しない必要経費
予備費	18,000	
積立金	0	
合計	591,000	

講座・同好会一覧

	定期講座・同好会	担当者	☎71局	曜日・時間	予定会場
1	歴史教養講座	網干善教	6510	第2火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
2	万葉講座	松岡禮一	2964	第1月曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室
3	先史学講座	泉拓良 問合せ 山内梅乃	1654	第3月曜日(15時～16時半)	北部出張所会議室
4	書道講座	田室西崖	7035	第3月曜日(13時～15時)	北部出張所会議室
5	読書会	問合せ 山内梅乃	1654	第4金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
6	英語講座 初級 英語講座 中級	橋本友子	0395	毎月曜日(9時半～10時半) 毎月曜日(10時半～11時半)	北部出張所会議室
7	中国語同好会初級 中国語同好会中級	松村如洋(ユキヒロ)	9605	毎木曜日(9時半～10時) 毎木曜日(10時～11時半)	北部出張所会議室
8	俳句入門 (平城山句会)	牧野和代 問合せ 藤沢陽子	1777 1956	第2木曜日(13時～16時)	平城院
9	短歌を楽しむ会	網干善教 問合せ 木庭和子	6510 3494	第3火曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室
10	絵画の会	大野貞男 問合せ 上田善次	72-2539	第1・3火曜日(10時～12時)	北部出張所会議室 神功集会所
11	写真同好会	赤坐右一	0111	概ね月2回日曜日、ニュースで通報	野外
12	……歩く会	広田省吾	0207	奇数月第3金曜日偶数月第4日曜日	野外
13	園芸の会	北村孫衛	0823	第4木曜日(13時～16時)	右京4－7－5
14	詩吟の会	吉本音市・西尾弘子 問合せ 花田清美	5036 2787	第1·2·3水曜日(10時～11時半) (13時半～15時)	北部出張所会議室
15	手踊り同好会	毛利公子	1989	第1・2金曜日(10時～12時)	北部出張所会議室
16	押し花を楽しむ会	廣崎光子	0774-73- 0702	第1木曜日(10時～16時) 第4水曜日(10時～16時)	北部出張所会議室
17	表装の会	西島芳子	72-0335	第2・4木曜日(10時～17時)	北部出張所会議室
18	料理を楽しむ会	松村せつ子	9605	第3木曜日(10時～12時)	平城東公民館
19	銅板レリーフ同好会	杉田英二 問合せ 皆藤るみ子	2960	第1・3金曜日(13時半～16時)	平城西公民館
20	パッチワーク研究会	打田照子	2879	第2・4金曜日(13時～16時)	北部出張所会議室
21	筥作りの会	問合せ 山内梅乃	1654	第2・4月曜日(10時～16時)	北部出張所会議室
22	木目込人形・押絵同好会	谷口直子 問合せ 石森千代子	3183	第1・3水曜日(10時～14時)	北部出張所会議室
23	地酒を味わう会	松本敏夫 問合せ 鈴木昭弘	1690	第2土曜日(18時半～)	会場不定
24	フォークダンスの会	宮川恵美子 問合せ 玉置小夜・馬場恭子	0066·6131	第1火曜日(13時半～16時) 第3木曜日(13時半～16時)	北部出張所会議室
25	「続日本紀」を読む会	渡辺馨	72-4855	第4火曜日(13時半～15時半)	北部出張所会議室
26	植物雑話講座	光岡祐彦 問合せ 山岡梅乃	2891 1654	第1金曜日(13時班～15時)	北部出張所会議室
27	ビーズアクセサリーの会	住吉紀子	1699	概ね年4～5回程度ニュースで通報	北部出張所会議室
28	マジック同好会	出口幸男 世話人 井上雄司	5236	第2土曜日(13時半～15時半) 第4金曜日(9時半～12時)	平城東公民館

会則

第一章　総則

第一条　この協会は、平城ニュータウン文化協会という。

第二条　事務局は、平城西公民館に置く。

第二章　目的及び事業

第三条　会員の研究・創作発表、知識の交換並びに会員相互間及び他の文化団体との連携提携の場となり、相互文化に関する進歩普及をはかり、地域文化の発展に寄与することを目的とする。

第四条　前項の目的を達成するために、次の事業を行う。

1　講演会・研修会・展覧会・発表会・文化講座等の開催。

2　関連文化団体との連携及び協力。

3　研究の奨励及び研究業績の表彰。

4　会誌の発行。

5　その他目的を達成するために必要な事業。

第三章　会員

第五条　平城ニュータウンに在住又は勤務する者で、協会の目的に賛同する者とする。会員の種別は次のとおりとする。

1　正会員　年間会費一、五〇〇円
　但し、高校生五〇〇円

2　賛助会員　この協会の趣旨に賛同する者で、年間会費五、〇〇〇円以上納める個人又は団体とする。

二、会員の更新手続きは不用とするが会費は総会後三ヶ月以内に納入のこと。但し、二年間会費納入なき場合は退会と見做す。

第四章　役員

第六条　協会にはつぎの役員を置く。

会長一名、副会長三名、常任理事若干名、事務局長一名、事務局次長一名、会計一

名、理事若干名、監事二名。

第七条　理事は、正会員中より選出する。

二　会長、副会長、常任理事は理事の互選で定め総会の承認を得る。

三　事務局長、事務局次長、会計は理事中より会長がこれを選任し、総会の承認を得る。

四　監事は会員中より二名選出する。

第八条　会長は協会を代表する。

二　副会長は会長を補佐し、会長事故ある時は代行する。

三　理事は理事会を組織し、協会に関する事項を審議し執行する。

四　常任理事は理事会の決定に基づき業務遂行に当たるとともに、総会で決議した事項を執行する。

五　事務局長は会務の遂行に関する理事会、常任理事会等の決議に基づき全般の事務連絡処理に当たる。

六　事務局次長は事務局長を補佐する。

七　会計は会計事務を処理する。

八　監事は会計帳簿を監査し、通常総会において報告する。

第九条　顧問・参与を置くことができる。顧問・参与は理事会の同意を得て会長が委嘱する。

二　顧問・参与は会議に出席して意見を述べることができる。

第十条　役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

二　補欠より選出された役員の任期は、前任者の残任期間とする。

三　役員はその任期満了後でも、後任者が就任するまで、なおその職務を行う。

第五章　会　議

第十一条　理事会は必要に応じ会長が招集する。但し、理事の三分の一以上から会議の目的を示して請求のあったときは、理事会を招集しなければならない。

二　理事会の議長は、会長又は会長の指

名する者とする。

三　理事会は理事の二分の一以上出席しなければ議事を開き議決することができない。

四　理事会の議事は、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決す。

第十二条　常任理事会は、会長、副会長、常任理事、事務局長、会計によって構成し、必要に応じ会長が招集する。以下理事会に準ずる。

第十三条　通常総会は毎年一回会長が招集する。

二　臨時総会は、理事会が必要と認めたとき会長が招集する。

三　総会の議長は総会出席者の中から指名する。

四　総会の議事は、出席者の過半数をもって決し可否同数のときは議長が決する。

第十四条　次の事項は通常総会に提出して、その承認を受けなければならない。

1　事業報告及び収支決算

2　会計監査報告

3　事業計画及び収支予算

4　その他理事会において必要と認めた事項。

第六章　会　計

第十五条　経費は会費並びに補助金、その他の収入による。

第十六条　会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。

第七章　会則の変更

第十七条　この会則は、総会の議決を得なければ変更することができない。

第八章　補　則

第十八条　この会則施行についての細則は、理事会の議決を得て別に定める。

第十九条　この会則は昭和五十八年二月二十七日から適用する。

2004年度 役員名簿

会長　網干善教
副会長　上田善次
事務局長　山内梅乃
事務次長　玉置小代
会計　大浦小枝子
監事　西村美佐子
　　東叡
参与　川口勇
　　谷口直子
常任理事　赤坐右一
　　石森千代子
　　井上雄司
　　打田照子
　　大迫くき枝
　　岡田越子
　　梶野哲
　　片岡圭子
　　北村孫衛
　　木庭和子
　　辻山博介
　　鈴木幸子
　　住吉紀子
　　田中幸夫
　　田室西崖
　　南村照榮
　　西島芳子
　　橋本友子
　　花田清美
　　馬場恭子
　　廣崎光子
　　廣田省吾
　　松岡禮一
　　松村如洋
　　松村せつ子
　　光岡祐彦
　　宮川恵美子
　　毛利公子

理事
渡邊馨
大井政子
大工美智子
筧ゆり子
河村美智子
喜多正恵
北村尚子
柴田晃良
濱口光良
山田綾子

組織分担

『層富』編集部
部長　松岡禮一
上田善次
木庭和子
西島芳子
廣田省吾
山内梅乃

広報部部長　梶野哲

文化祭上演部
部長　山内梅乃
北村孫衛
鈴木幸子
花田清美
松村如洋
宮川恵美子
毛利公子

文化祭展示部
部長　上田善次
赤坐右一
石森千代子
打田照子
岡田越子
梶野哲
廣崎光子
廣田省吾
辺山博介

行事部　部長　東叡
赤坐右一
廣田省吾
松岡禮一

組織部　部長　松村せつ子

配布部員

神功地区（廣田　省吾）

第1団地
1丁目　北川尚子
河村美智子
1丁目ガーデンハウス
藤沢陽子
2丁目　土橋覺二
3丁目　木庭和子
高橋はる江
4丁目　酒井不二夫
5丁目　筧　ゆり子
6丁目　上田善次

右京地区（山内　梅乃）

第2団地
水野棨三
幸路喜代
3丁目　飯田雅子
山内梅乃
下司まさ子
片岡圭子
4丁目　岡田越子
山田綾子
菅千尋
5丁目　石川敏子

右京団地
西村美佐子

朱雀地区（玉置　小代）

1丁目　宮崎滋子
井本市子
玉置小代
2丁目　打田照子
3丁目　鈴木幸子
4丁目　日下部清美
5丁目　奥谷敏子
鈴木和子

第1住宅
大井政子
鈴木幸子

第2住宅
永井圭子

左京地区（久本　美鈴）

1丁目　久本美鈴
2丁目　喜多正恵
3・4丁目　黒田節子

駅東団地
北原昭子

編集後記

奈良市立中央図書館蔵書

◆猛暑、猛暑、イヤ、酷暑の夏でした。毎年「異常気象」という言葉を使っています。今年も異常気象というべき日が続きましたが、会員の諸兄姉の皆々様には、お健やかにお過しの御事と存じます。

◆本年度から編集部へ、力強い助っ人三名も加わってくれました。有り難いことです。

◆連載の「〝すかたん近衛兵〟なげき節」も、この度で、最終回になるようです。なかなか知る事の出来ない皇居の、しかも、空襲による炎上という状態を――――――刻々変化する様子を手に取るように語って下さいました。会員の皆さんも、感動されることでしょう。出来れば、「続編」か、「後日談」か、伺いたいものです。

◆いつも投稿して下さる御意見や御感想は、今年はありませんでした。それにつれらたわけではありませんが、「会員名簿」の記載をやめましたので、いささか寂しい冊子になりました。けれども、色々工夫を凝らして執筆して下さっている『グループ便り』だけは、やはり、その光彩を放っているように思われます。

◆今年は、例年より早く初校が来ました。よって、例年より早く「第二十一号」をお届けする事が出来ましたので喜んでおります。

（文責　松岡禮一）

編集委員　松岡禮一　上田善次　木庭和子
西島芳子　廣田省吾　山内梅乃